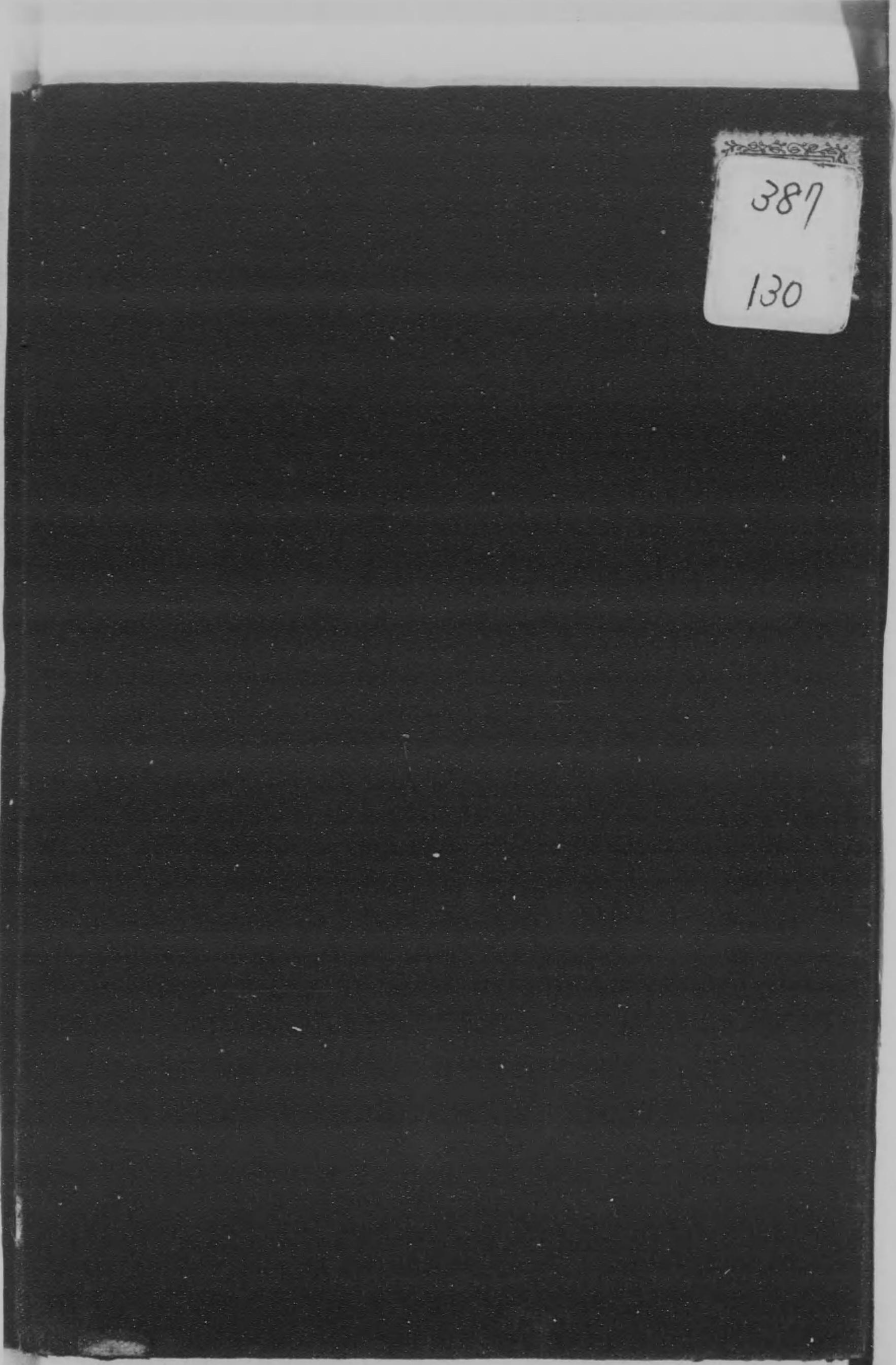




始



387
130

社會改造の根本問題

左近義弼著

081-788

國に奉ずる念 熾なる

親友 赤尾善治郎君に

此を ささげる

387-130

はしがき

社會改造の根本問題

はしがき

腰に 二振を 佩きし昔は、いつも 危なかつた武
 士も、彌 丸腰と なりし後; 初めて 枕を 高くす
 ることが できた。 こそ 武装して、平和を ね
 らふ 列國も、軍備を 全く撤廢して、初めて 互
 に 睦み親まれる。 ほろ酔ひの酒に 空元氣を 張
 り、一服の烟草に 眼を細くして、當座の退屈を 紛
 はすよりも; 一杯の冷水に 一氣息の背伸びは、更に
 新に 心と身とを 強くする。 一週 休み無しの
 のむべむだらり よりも; 日曜を休める 六日の働き
 は、更に大に 能率を 高める。 資本家が 自身
 暴利を貪れば、労働者は 反て さぼり; 大地主が
 慎みて、慾を制すれば; 小作人は 喜びて、骨を惜ま
 ぬ。 家に 一粒の飯を ありがたく 食ひ、一滴の
 水を 謝して 飲めば大國正在りては、生活難も 到

9. 4. 19

内交

らず、飢饉も起らぬ。男女各自性を貴めば、風紀は亂れず；倫道は腐らぬ。世に阿る學者が鸚鵡的や、藝を切り賣る教師が蓄音器的の學校商賣を改むれば；不良少年等は悉く影を隠し；無官の宰相たるべき、新聞記者が徒に筆を曲げねば、社會は隈なく清くなる。迷信を離れて、信仰に活くるには；なぞなぞの哲學をすてて、深く耶蘇教に入り、親しく神を拜まねばならぬ。

かく左を見、右を眺め、後を顧み、前を望めば；改良の上にも改良、創造の上にも創造を要する。しかもこの改造を全うするには；ただ従來の數多き難符牒たる漢字や假名文字を擲つて；早くロマ字の略符號を採らねばならぬ。

以上は多年予の小さ頭の中を絶間なく往き來し；爲に心臓さへ破るるばかりに溢れ漲つてをる。故に年の末、歳の初にわたりし學校の休暇を利用して；九州や四國を巡り往き；小い集ひ、僅な聴衆に、心の底をさらけ出したほ

とぼりがこの‘社會改造の根本問題’の四講。各講二時間たらず、しかも秩序も立てず、語りたる此等を、家に歸りて、掻き集め；親しき友赤尾善治郎君の勸によりて、今此を公にし；弘く世の同意協力を求める。そしてその上に尙尙更に大に神の祝福を祈り祈る。

千九百二十年三月十三日

横濱を出る鹿島丸で
赤尾君を送りたる日

空念しるす。

社會改造の根本問題

目次

はしがき	
第一講 夫婦の義務	1 頁
第二講 性の教育	38 頁
第三講 食料問題	72 頁
第四講 國字問題	105 頁

第一講 夫婦の義務

天地の開闢 太初に 神 天地を造りし時、‘光あらしめよ’と言はれた。が 今日 わが太陽系の一小天地に在りて、僅に その直徑八十六萬四千マイルで、一秒時間に 十八萬六千マイルを走る光の太陽を 光の源の如く 思へる我等には、この太陽の 形づくられし前に 他の光が あられようとは 少も考へられなかつた。しかし 我等の太陽系の外に 幾億と云ふ太陽を 中心と せる 幾億と 數の知れぬ天體のあるのを 思へば、この太陽の 形づくられし前に 光の あつたのは 何も 不思議ではない。しかも 今日 スペクトロスコープを用ひ、銀河のはるか 彼方に於て、そのネビュラの 光のみにて、未だ 星と 成らぬものが 或は ぐるぐると 旋り 或は 幾億里と 噴上げ 飛散り；その飛沫が 各自 一個の星と なるものさへ はかり見ることが ほぼ

出来るやうになつた。そしてその飛沫が一個の星と冷え固まる迄には幾億億年を要し；しかも既に固まつた星となつて後、その放てる光が遠く離れてる我等の眼に達する迄に又幾億の歳月を要するかと云ふ廣大無邊なものには心の眼もくらむばかりにただただ驚くの外はない。

永いことをただ‘無窮’と言ひすませるものの、その無窮は真に無窮で億億年の億億倍も比べられぬほどに永い；又、廣いことをただ‘無邊’と言ひ放てるものの、その無邊は實に無邊で億億里の億億倍も尙長さなく、厚さなく、高さなき一點にも當らぬほどに廣い。それほど永い時の一瞬にあらはれ、それほど廣い處の一點にあるアトムの如き——我等の住めるこの小き星——しかも直徑八千マイルに近く、周圍二萬五千マイルに足らず、面積二千六百億方マイル、重量6,0000,0000,0000,0000,0000トンありと云ふこの地球；小は頗る小なれど、大

は又頗る大；山と云ひ、河と云ひ、又その中に幾億の植物や動物美を盡し善を極めて造られたるこの神の奇しき手細工、げにただ我を忘れて‘アア’と驚き叫ぶ外はない。

人は神の傑作 神初の一日に光を造り、二日に天を造り、三日に地を造り、四日に月日星を造り、五日に諸の動物を造り、六日に人を神御自身の如くに造られた。即ち人は神の最後の作であつて、しかも神の最も心と力をこめた傑作である。ただに物質上から見ても、顯微鏡に映る小い人の身體の構造は望遠鏡に映る大なる天體の構造よりも更に大きく、更に美しい。そしていかなる天然の美を以てするも善を以てするも、とても及ばぬ物質以外の靈の魂を與へ；そして我等人たる者に生まさせ、殖やさせ、みたさせて、神の傑作其者に更に工を加へしめて、地には人の幸福、天には神の榮光

を限りなからしめようとしてゐる。蛆蟲の如き我等も亦偉大なるを喜ばざるを得ない。

服従こかく 神は 全智全能全愛であるから 何れ自由れもかも 人を待たずして 自由に十分に 出来るが、亦 人にも 幾らかの自由を與へて あるから、狭い有限の界と 浅い無智の間とに於て、まづ 絶對の服従に よりて、初めて 得らるる 眞の自由をも 許して ある。故に 神に従へば 自由があり、従はねば 自由がない。即ち 神の 定めたる 自然の法則に従うて 人の身體は 成長し、神の 喜べる 聖旨を守りて 人の靈性は 發達する。

およそ 人の事業なるものは 事業其物に 絶對に '大' と いふべき物も なければ、亦 絶對に '善' と 呼ばるべき物も ない； いづれも '大小輕重' と いひ、'貴賤上下' と いふも 畢竟 彼此比較上のことで、事や物の善惡すら 全く 時と處とによるものである。善とは 時に かなひたる

こと、惡とは 處に あはざるもの；故に 同一の行爲にしても 昨は 善なりしに、今は 惡となるのがある。物に事に その一利一害とは その物や事の兩面を 別個に見たるほどの こと、必ずしも 絶對の一利一害ではない。'罪' と いはるる その行爲でも その爲すこと 其物が 絶對に 悪いから '罪' と いふのではない、'するな、いふな、思ふな' と いふ事を なし、いひ、思ふからそれが 悪いので、罪となる：たとへば アザムと エフが エデンの園で 罪を犯したのも、あの木の實を食うた行爲 そのことが 絶對に悪い恐ろしい罪ではない、神の命令に叛いたのが 大に悪いので、深い罪となつたのである。法律のない處には 刑罰もなく、無道徳の子供に 罪のないのも この理由；不道徳と無道徳との差も 亦 これ。

事業は 天は 神の位、地は その足臺であるから、神 何一つ 人より 得ようとは なさらない；

ただ 至て善美に 最も幸福に 成長する人の樂を見て、神は それを 喜ばるのみで、其外には 何も 望まない。故に 人が アフリカの砂漠を 青青と 水田に しようが、パナマの地峽を 切通さうが、アンデスの山を くり抜かうが 其等の仕事は 反て 天然の美しい景色を あらして、神の迷惑かも知れぬ。しかし、その殺風景な 迷惑 この上なき仕事さへ 神 これを許しおくは、ただ その仕事 が 人の體と智と徳とを つよめ進む運動法となるようにとの 愛の聖旨に 外ならない。たとへば 幼兒が 親の する 掃除を 手傳ふ積りにて、或は 雑巾もて 床を汚し、或は 器を損じ、或は 倒れて 泣き、末は 物をも身をも 共に抱上げしむるなど 反て 親の時をも金をも 餘計に失はしむるに 至る；之をも 尙 忍びて、その幼兒の なす ままに 許しおくのは 全く 子の成長と幸福とを 願ひ居る親の愛心ならでは とても 堪へられるもので ない。

千差萬別に 平等の愛 人に 男女あり、老若あり、大小強弱賢愚ありて、世界十七億の人人 一人として 同じからぬ計りで なく、同じ両親より 生れた 五人十人の兄弟姉妹すら 何一つ 同じのは ない；身體の中の 目一つ 鼻一つ、飲食ひの すき嫌ひ、趣味の濃淡 各自 その寸分も 異ならぬのは ない。されば 各自の體質や能力や境遇の差に應じて、その取るべき 運動法たる職業も 違はざるを 得ない；詩人あれば 學者も ある、政治家あれば 實業家も ある、雇ひ主あれば 雇はれ人も ある。その立てる地位、その取る仕事の 何たるを問はず、眞心を込めて 勤むれば、各自 人の望むべき 生涯の幸福と 生命の成長とを 進む 人生最大の目的を 達することが できる。人の人たる人となるには 巨額の財寶も 入らぬ、宰相の高位も 入らぬ、學者の智慧も 入らぬ；其等の財寶高位智識は 大人物となるには いるかも知れぬ、しかし 大善人となるには いらざるもの；しかも 大人物たるは 一時の

ことで、貴からぬもの；之に反し、大善人たるは永遠のことで最も貴いもの；故に各自その婢たるも、僕たるも、職人たるも、官吏たるも、學者たるも、宗教家たるもを問はず、何れの時、何れの處、直にたやすく貴き大善人となることができる。そして千載一遇の機を待ちて、千萬人中僅に一人のみ握り得べき、それもさして貴からぬ一個の大人物となることの得難かるはけだし神が人を平等に愛し、一様に恵める明な證據。その神の愛と智と力とを信する者の立てる現在の場所は、その儘の天國、なせる日常の業務は、さながらの聖職、俗界の暗黒裡に輝ける。日々の生活は正にこれ永遠の生命を生き榮え居る者。

神の御手傳ひ 神は全智全能全愛であるからに、人の手を借らずして、何事をも仕遂げられる。しかし又一方には、その全智全能全愛なるが故に人の手を

借らねば神ながらになさない；いやなし得ない事がある。故に人を神御自身の象に形ざりて造り、これに生まれさせ殖えさせ満たさせて、全地の萬物を治めしむる所以である。夫婦共に子を生まれて、初めて親となり；親となりて、初めて愛の愛たるを子に教へられる。親は子を育て、子は又親を育てる。親と子どもの間に神と人との關係を窺はれる。

人の仕事は凡て生命の運動法に過ぎぬが、ただ一つ仕事その物に貴いものがある：即ち子を生むこと此のみが實に貴い。神は天地の開闢當時に、アザムを造りし如く、今とてもなほ兩親なしに男を造り；又アザムよりエワを造りし如く、なほ母親なしに女を造るのが今でもさして難くないことは近頃やや生物學の進めるにつれて、實驗されて來た。それにも拘らずなほも愚な弱い男女の兩親を煩すまでに甚だしい面倒を忍びて、人類の生生を計るといふ神

の至愛の無量なるは、我等の汲み取られぬほどにありがたい。

十誠 モーセの十誠は、あれでもヒブリ文學の粹をきはめ、活ける詩、輝ける法、短く強く、互に律を合せ、調を揃へたるもの；のみならず、リ非記申命記中、何れのいかなる律法とても、皆五と五との對立：たとへば男に對する五あれば女に對する五、貸主に對する五あれば借主に對する五あるも、つまりこのモーセの十誠に基けるものである。さてその十誠の初の五が神に對する人の義務を示し、次の五が人に對する相互の義務を教へてゐる。しかも神に對する人の義務の第五誠が「汝の父と母とを敬へ」である。

ヤソ教の孝道 耶蘇教の孝道は從來の儒教や普通の倫理とは雲泥にちがふ。されど古來の「忠臣は孝子の門より出づ」とか、「身體髮膚之を父母

にうく、敢て毀傷せざるは「孝の基なり」をも悉く洩らさずふくむでをる。

是迄のわが孝道はその目安が甚だ低い；そして親が酒の爲の病氣とか不身持の爲の借金とかで、いよいよその生活に困る時、憐むべき娘が無分別にも直に身を花柳界に賣り下げて、反て親の罪に罪を重ねしめ、剩へあたら身體髮膚をば恐るべき梅毒の傳播器として、幾多壯年の筋骨を腐らせ、國家の精髓を毒することが少くはない；しかも世の中では之を孝行娘の義舉として、黒を白に、罪を功に、惡を善に言ひ變へて、時の新聞紙を賑してをる；氣の毒ども、憫ども開いた口は中中塞がらない。

神の業を務むる局部 耶蘇教の孝道は決して親の惡を助けたり、社會の風紀をみだすやうな一時の感情ではない。親が艱み苦めばその親の身をも心をも救ひ、亦ともに娘の身をも心をも全うし、

等しく 社會をも 清めしむる孝道; しかも 朽果つる身を 朽果てざる體に 變へしむる孝道; この清い高い孝道こそ 父母を 神として 敬まへどの 耶蘇教の孝道; この孝道 あらば 昔時 平重盛も 忠孝兩道を 全うされたものを。

人を造るのは 神の業、子を生むのは 父母が 神の業を 手傳ふに すぎぬ。故に 子を生む父母は 地上に臨める 神の代理、その代理として 生み育てたる父母を 神として 敬ふのは 子たる者の 正に 然るべき心掛である。

招じきれぬ神をも ソロモンは いはひ込めようとて、巨億の金銀を獻げて 聖殿を建て、その聖殿の中にも 特に 聖き聖き至聖處を 設け、其處へは ただ 年に 一度だけ 祭司長が は入つて 神に見ゆることが 許された。しかし 人の手で 作つた宮は 實際 神を迎ふるに 足らぬ; 眞に 神を迎へ入るべき聖い宮は バウルが '聖靈の宮' と 言うた 我等の身體である。そして この身體は 儘に

ソロモンの 築いた 拜殿よりも 大きく、更に 貴い; それに 又 この身體の中には かの拜殿の至聖處よりも 聖い貴い至聖處がある。この至聖處が 我等の身體の中心、最も安全な、決して 他人に見られぬ さはられぬ、奥の奥に 秘められてある。この至聖處に於てのみ 許され選まれし祭司長; 即ち 男女の夫婦のみが、腰に いちじくの葉を さへ まどはず、包まず隠さず ありのままにて、神の前に まみえ、神の業を 喜び樂むで 手傳ふことができる。

さて 聖靈の宮たる身體の中、奥の最も奥に あたる、我等の至聖處の構造は ソロモンの拜殿の至聖處の夫よりも 更に 幾百倍の精美を極め、更に 幾億倍の巧妙を盡してゐる; 即ち 予が '男寶、女寶' といふものの 男の莖は 女の核、男の袋は 女の子宮、男の二の丸は 女の左右の卵巢; かくて 男寶は 外に出で、女寶は 内に入り; この内外の凸凹、生理上にも心理上にも 互に あひ調節して、爰

に 神業にとて、心の愛と身の方とを 全く獻げて、
人の 行ふ 最大最高最美最聖の大事業たる 子を生
むに 努むることが できる。 素より その事業
の 最も聖い 最も大いだけに 人生の最大快樂と最
大苦痛とが 伴うてる。

夫婦 神は 人を 男と女とに つくり、そして
彼等は 父をも母をも 離れて、二人 共に同じの
肉と なるべく、人目の とごかぬ、人聲の 達せぬ
神の前にて、包まず隠さず ありのままの裸體で 至
聖處に あひ見ゆべきで ある。

男女 各自 一人づつ この本能に基いて、互に相
えらび、親族朋友 共に 可と認むる者、これ 神よ
り 許されたる夫婦； この正當な夫婦にして 初め
て 正當な神業に 與ることが できる。

人生の行事中 帝王の位に即く 戴冠式、大統領の
職に就く 就任式、或は 福音の傳道者が しづしづ
と 法壇に登るの時、何れも その嚴肅ならざるは

ないが、中にも 特に 嚴肅の上にも 嚴肅なるべ
く、前以て 沐浴齋戒して、聊の曇りなく よごみな
く、澄み渡れる月の さやけさと、のどけき春の香へ
る花の心とを 以てすべきは、夫婦たる者の 床入り
の心掛で ある。 裸體で 生れ來て、裸體で 死に
往くまでの 人の生涯に、虚儀なしに 裸體で 活
く 人の 眞の生命は ただ 夫婦の拜殿たる床の中
に 於てのみ 無邪氣とも 天真とも 爛漫たる無我
の境に ながらへられる。

睡室 幾億年の昔、ネビュラより 飛離れし時の そ
の熱は 今尙 この地球の中心に のこり、その氣息
を塞がるれば 地震と ゆるぎ、吐出せば 火山と
裂け、深く納まれる分は 温泉と ながる。 しかも
その火山 おほき 我國の同胞とて、自然の 然らし
むるところか、その痼癘丸に於ては 火山の破裂より
も 夥しく、その小膽なるに於ては 地震よりも は
げしく びくつき、剩へ 家の構造の か弱き、誰か

の鼻息にさへ 礎までも 動き、天井の鼠の角力にさへ 戸障子の がたつく 寢室の あはれさ; かかる地の上 かかる家の中にて やごされ、生み落され、育て上げられ、教へ込まれる子供の みじめさ、考へ見れば 泣くにも 泣かれぬほどでは ないか。

一體 わが國の家屋は 一時の假小屋的で、永遠的の耐久性を その住人に 移すに たらぬ。全部が それなのに、わけても 用の少い 客間などに金を かけ、金銀寶玉よりも 大切な子供の 遊び部屋も なく; 最も清潔に 最も明るかるべき 臺處は 反て 暗き穢き微菌の發生所; 特に 最も静に最も安全に、水も もらさぬ 密室で あるべき 夫婦の寢間が 薄い障子や襖の たてつけか、或は 屏風一折の境にて、一家雜居の不始末; 氣を 四方に配り、戦戦兢兢として、心身 共に 不安 極まる 境遇に於て、いかで 神聖なる 夫婦の大業に 全心全力を注ぐことが できようぞ。事の本末を 知らず、物の輕重を 思はぬのも 甚だしい。故に ま

づ 家を建てむと ならば、客室などは ほんの 間に合せに しつらひ; 餘は 夫婦の寢間を 城の如く 宮の如く、固く美しく つくり; 子供等の遊び部屋を 道場の如くに きづき; 生命を養ふ臺處を 最も衛生的に 最も經濟的に つくるが よい。かかる安全な寢室で 生るる子供は 度胸 おのづから 据り; 三日にして 散る 櫻花などを 國花として 喜ぶ 似而非愛國者にも ならず、僅な事に 仕方なしと 失望の末、短氣な自殺を 男子の快事と 思ひ違へる 大罪にも 陥らぬようになる。精巧に強大なる器具を 作るには 廣き淨き工場を 要する; まして 神業を手傳ふ夫婦の寢室の 大切なるに 於てをやである。

姪 娘 夫婦の その聖業に たづさはるのは 素より 神の前に 嘉され、人の前に 許されたる當人等が 愛情の融合と 肉身の調和とに ありて、その結べる實は 子として 親の分身とも めづべきで; 初

め エワが「我 ャウエに 依りて 生むだ」とも
 「我 ャウエを 生むだ」とも 言うて、驚いたのは
 さも あるべきで、人ながら 人以上：即ち 親の
 與へ得ざる生命(靈)を もてる 別の己を 生むだか
 らで ある。

白き光も その街燈のグラス次第で、赤くも青く
 も なる。それで 同じ神よりの生命も 親より
 出づる 分身の如何で、其子の氣質や人格を透して
 個個別別の人格と 現れる。マリヤが 神の榮光
 と イスラエルの救済とを 念じ續けて、耶蘇を生む
 だのも、瓜の蔓に 茄の ならぬのも この理を 外
 れない。時時刻刻に 變化し居る 親の生命が 肉
 身に 傳はり傳はる その刹那に やどれる 子の氣
 分體質 ともに 親に あやかべきは 争ふまで
 も ない。

子の幼い時、村では 月に 一度、「庚申待」とい
 ひ；村中 巡り番に、その夕 一軒の家に集まりて、
 酒を飲むのが 目的で あつた。そして 故老が

屢「庚申さまは 子供を嫌いやさかい、庚申様の夜
 はらむと 阿呆か氣狂が 生れるのや」と言うたの
 を 子供心に 耳に挿むで 來た。それも その
 筈、酒に酔うて、神経も細胞も みだれ狂うてるま
 の夫の酔興に 夫婦の聖業を けがした 結果に 外
 ならぬ。

あの伶俐なヤコブが デバンの娘等を娶り、そし
 て お禮奉公の報酬として、班や黒毛などの 牛や羊
 や山羊を もらふことに 約束し；早速 生木の枝を
 切り、その皮を剝いで、それぞれの模様を つけ；夕
 方 家畜の來て、水を飲む時；強い善い牛や羊の目の
 前には その樹の枝を立てて、之を眺むる間に つが
 はせ、弱い悪いのが 來ると、その枝を 隠したの
 で 其後 生れた 子牛や子羊の 強いのが 己の有
 と なり、弱い悪いのが デバンの有と なつた。

此を見ても、身ごもれる母の胎が、恰も寫真器のピ
 ルムの如なもので、その目に映る色や形、その耳に響
 く音や聲、その心に感ずる喜びや悲み 細大漏らさ

す 悉く 胎兒の幾部分を 形づくるもの、母の心
佛なれば 佛を生み、鬼なれば 鬼を生むものとは
疑はれぬ事實と 信せざるを 得ない。

兩性の 生れつき とも 子を生むと いふ、これ全く 神
業で ある。 夫婦 いかにか 心を込めばとて、又
いかにか 力を盡せばとて、神より與へられぬ子は と
ても 生れるもので なく、亦 子の 生るること
餘りに多ければとて、徒に 之を防げるものでも な
い。 それと 同じく その生るる子の 男と な
り、女と なるのも 亦 全く 神の力にて 定めら
れてる。 が 父母として 神の代理たる權能上 幾
分か その心掛次第で、之を右にしては 男と し；
左にしては 女と するに やや あづかつて 力
が ないでもない。

まづ 男の子のみにて 女の子 なく、いかにもし
て 女の子をと のぞまば、少くも 一週間 特別
に 妻の體力を 養ひおき；さて いよいよ 床に入

りて、性交の 正に熟するを計り、夫は 妻よりも
幾分か先手に 放注し、妻は 夫に續いて 放射すれ
ば、大抵 女の子 やどり；之に反し 女の子 多く
して 男の子 なきを 悲める者は、以上の反對に
數日の間 特別に 夫の體を養ひおき、さて いよいよ
その神業に與らむとするに あたり、時を計り
て、妻は 夫よりも 幾らか先手に 放射し、夫は
少し後れて 放注すれば 大抵 男の子の 生るるよ
うに なるかと 信じられる。

胎 教 かくて 一旦 やどりし胎兒も なほ 器の中
の水の如きもので、母たる者の一喜一憂は、申すまで
もなく；その食ふ 食物、著る著物さへ 胎兒の性
質に 大なる影響を 及ぼすものである。 予の在
米中、田舎の或家に 一疋の身ごもれる牝牛が ゐ
た。 ただ 牛とては これ一疋 後園の林檎の樹の
間に 放ちおかれ、その遊び仲間には 小い山羊のみ
が 一疋 ゐた。 そして 朝から晩まで 常に こ

の 牝牛の目に映るものは 其の山羊の 鳴く毎に
 びりびり ふり動かす あの短い臀尾ばかりで あつ
 たものか、月 みちて、生み落しし子牛は 牛の子に
 も似ず、山羊の如き 短い 不格好な尾を 臀に 下
 げて ゐた。

これも 亦 ある時 あの處の事で あつた。ある
 睦じい夫婦で、その夫は 常に 旅出がちで、家に在
 ることは 割合に少かつた。そして その操を堅く
 守れる 留守居の妻が 正しく 月 みちて、生み
 し その子の目もと口もと そつくり 筋向ふの松ざ
 んとか 若主人とかに 似てるとて；其處ら界限の大
 騒ぎと なつたさうで ある。思へば 之も 無智
 の 招くところ、罪なき妻を 疑ふべきで ない；つ
 まり 年中 夫の面を見ることの 少きに 引換へ；
 筋向ふの番頭さんか 若主人が 朝な夕なに 眺め合
 ふ その都度 胎兒の面影に 映り重なりしに 過ぎ
 ぬ。

又 二三年前のこと、予が知人の知人に、揃ひも揃

うて 業平と小町かとも いはるべき 良い釣合の夫
 婦が あつた。そして その兩人の間に 一人の娘
 が 生れた。ところが その兩親に 似もやらず；
 べちやんこ鼻のオカメ嬢なのには 見る毎に 誰
 一人 怪み驚かぬ者は なかつた。よくよく その
 理由を尋ね見ると、久しい前に 浅草の酉の市で 求
 め歸りし 熊手のオカメの面が 平生 著しく 母の
 目に附くところの 壁に 掛けられて あつたこと
 が わかつた。

妊婦が 火事を見れば 胎兒に 赤あざを 印し；
 黒熊を見て 驚けば 黒あざを のこし、しかも そ
 の面なり 腰なり、母の手の 母の身に ふれし 個
 處に あざを 生ずるとは 不可思議ながら 打消さ
 れぬ事實；又 そのあざも 子の生れし時に 流れ出
 た お産の血を 摺り込めば、そのあざが 消えて
 無くなるとの説も あるから、その時に當つて、その
 信否を 試むるが よい；幸に 消え去れば 仕合
 せ；消えねばとて 何等の損も なきことゆゑ。

嬰兒の かくて 生れた子を いかにか 養ふべきか
 育て方 ならば、其等の委しい事は 育兒法の書物に 書
 いて あるから、予は 今更 くださしく 述べる
 迄も ないが；全體 産婦の乳は 初め二日の間は
 餘りに出ぬもの；故に まづ 生兒一般の授乳法則と
 しては、初め二日は 一日（二十四時間）に 晝は
 三回、夜の十時に 一回で よい。 第三日より 六
 週間は 一日に 十回として、晝は 二時間おきに
 一回づつ 夜は 二回；六週間以上 三月までは、一
 日に 八回として、晝は 二時間半おきに 一回づ
 つ 夜は 二回；三月以上 五月までは、一日に 七
 回として 晝は 三時間おきに 一回；夜は 一回；
 五ヶ月以上 十二月までは 一日に 六回とし、三
 時間おきに 一回、夜は 飲まさぬものと 定めて
 おけば よい；そして いづれも 乳房を ふくま
 せるのは 一回を 二十分以内と 限るが よい；
 二十分以上も 吸付けるやうでは 乳の出不足。

母乳を授くる期間を 一年に かざる；一年後の哺

乳は 母にも子にも 雙方に 害があつても 効が
 ない。そして たどひ その一年内と いへども、
 もし 母の胎に 次の子の やどれりと 知らば、決
 して その乳を 飲ましては ならぬ。

授乳中 乳を飲ます前には 食鹽水に浸したガーゼな
 の心得 どで よく 乳房を ふき；特に 乳兒の舌をば 必
 ず 授乳の前後に 丁寧に ふかねば ならぬ。 乳
 時と乳時との間に、決して かのゴム製の乳頭を 咬
 へさしては ならぬ；それは 乳時を亂れしむる悪習
 を 養ふのみならず、子供の 柔い耳鼻咽喉の骨を
 ゆがめて、後日 種種の病を かもすから。

嬰兒は 大抵 日に 二度位の便通は あるが、長
 ずるに随ひ 秘結するやうに なる。 秘結すると
 熱を起したり、いろいろ 病氣に なるから、必ず
 一日に 一度は 便通を つけさせねば ならぬ。
 種種の方法もあらうが 最も安全な方は 左の下腹の
 處の直腸を なでて やるのが よい。

乳兒を寝かすには 乳を飲ます毎に、枕に就く 頭のむきを 今は 後、今は 右、今は 左と 必ず 順繰りに 換へねば ならぬ。すべて 頭の形は 其中に在る 腦髓の形に 基くものであるが、さればとて 生兒の頭骸は まだまだ 搗きだての餅の如く、揉みやう 一つ、押へやう 一つで 平くも圓くも なる；故に 左右後と 枕を換ふれば 後のみ 押付けられた 巾著頭の 不格好を 防ぐことができる；そして 左枕の時には 右の腰に 物を かいこみ、右枕の時には 左の腰に 物を かいこまねば ならぬ。

乳を飲ますにも 初めから 一度も 抱上げぬ位に 心せねば ならぬ；一旦 抱き癖が ついたら 最後、抱かねば 必ず 泣く。又 寝かすにも 抱いて 添寝するのは 母子の爲に 甚だ 善くない；乳兒一人 離して、それで 寒かつたら 湯タムボを 添へて 寝かしおけば、後日 離れた 別の室にでも 暗がりをおはがらずに おとなしく 寝る

やうになる。生兒を 初めの三四ヶ月に 規則ただしく 育ておけば、將來の習慣が 大體 定まつたものと 見ても 差支は あるまい。

嬰兒の格 生れた計りの嬰兒でも やはり 人；しかし 大人を 小く縮めた人ではない；是から 大人に成りかかる 幼い人で まだ 發達は せぬが、しかし 大人と なり得る 凡ての物を そなへて なる；決して 父母や祖父母の玩具でも 人形でもない。故に 父母は どこまでも 乳兒の人格と自由とを 重んぜねば ならぬ。衣物の如きも 幾百圓の金を掛けた縮緬のを 纏はれて 父母や祖父母の手から手 膝から膝へと 見世物扱ひに さるるよりも；幾十枚の襦袢を 備へおかれて、常に 乾いたさつぱりとしたのを 取換へ引換へ あてがはれて、ぐつぐつと 妨げられずに 寝かされた方が どれほど ありがたいか 知れぬ；それに そら おばさんが 来たとか いどころが 来たとか 言うて、折角

寝入つた 寝ばなをも かまはず なさけ容赦も なく ひき起して、いや、色が 白いの 鼻が 高いのと 糞お世辭にも 程がある；睡い目を覺まさして、さあ 一つ お笑ひ、‘バア’ など；最早 失禮を通り越して 無慈悲とも非道とも 斯る我儘勝手な親達を 責むるに足る言葉がない。 憐れな乳兒は 大人に語らふにも 舌が まはらぬ、唯一の言葉は 泣くばかり；乳が わるければ 泣く；お腹が すけば 泣く；おしめが よごれてれば 泣く；體量が ふえず、大便が 臭く青すめば 泣く；それに 無智な親や 心なき子守は ‘オロロ、アワワ、ネンネコロ’ など 壓制と輕侮とで 嬰兒の訴を 撥ねつけもし、押しつぶしも する；予は 幾百萬の無告の乳兒に代り 世の父母に向ひ 聲の潤るるまでも 叫びて、その覺醒を 促したい。

切 禮 さて 世界に於ける 學者と云ふ 學者、藝術家と云ふ 藝術家、事業家と云ふ 事業家をも 出

し、全世界の全力を 握り居るユダヤ人の 今日あるは 抑も 何に因るかど 問はば 予は 憚らず疑はず ‘神 アブラハムに 命じし 切禮の勵行に 基く’ と 答へる。

アブラハムは 凡そ 四千二百年前、その子イサクを 神の 命じし通り、生れて 八日目に つばえて、今日までも ユダヤ人を 祝し、又 その十三歳の庶子イシュマエルを つばえて 今日までも モハメット等を 恵むだ。その選びし神と 選ばれし民との 契約の條件として 最も手軽に ただ つばえる その事のみで かくも 生理上に精神上に 及ばず 影響の大なるは 殆ど 我等の豫想外である。

生れて 八日目に つばえるとは、丁度 臍の緒の 落つる頃に あたり、男の子の男實の莖の包皮の、その端の 餘れる分を 切取ることである。

この莖を包める皮の 端に餘れる分も 母の胎内に 居た頃は 勿論 必要で あつたに 違ひないが；さて 生れ出でて 後は 最早 何等の用も なくなつ

た。そのままに 残しおけば 反て この皮に 包み込まれをる 莖の頸に當る溝に 臭い粕を かもし造り、それがため 次第に 痒く なる。痒さは かゆし、かかれは せず; 爰に於て 嬰兒 いよいよ ちれつたがり 泣きに泣き、泣き續けて 泣蟲となり、遂に その‘蟲氣’と云ふ 手も附けられぬ 厄介病に かかる。

しかし その子 やや 長じて、手の きくに随ひ、その男寶の莖 痒ければ 此を搔き、搔き續くる間に、その局部には 最も密に 神経の 集まれることとて、思はず知らずに その神経を刺戟し; 遂に その莖を むくみ立たしめ、むくみ立てば 子供ながらに 幾らかの快感を 覚えざるを得ぬ。一旦 その快感を覺ゆれば、他に走せ向ふ餘念の ない 子供 只管 その莖を ひねくりひねくり 押したり引いたり 又しても又しても むくみ立たして 快感を 貪るやうに なり; 知らず知らず 恐るべき 手淫の大害に 陥り、將來 いかなる大人物に ならうも

知れぬ あたら 子供を 花の蕾に 朽果てしめる; 悲惨の極で ある。

手淫の害 かく 男寶の 莖の こすれるのが 何となく 氣持の良いところから、子供には 母親や子守の背に跨り、ひよこひよこ 跳ね踊るのが 楽しい; 木馬に跨りて すべり擦るのも 嬉しい; 樹に 搔き上げるのも おもしろい。

これも 亦 予が 在米の時であつた。ある富める家の男の子が 次第に 顔色の 青ざめるので、家附の醫者に 見せても、どうも その病源が わからぬ。そこで 家の保母を呼びて、その子の 最も好む 遊び事を 尋ねた。ところが その子の 日 日 最も喜びで する 遊び方は 二階の階段の 三間にも餘る手摺りを 馬騎りに跨りて、すべり降りることで あつた。故に 早速 その遊びを 差止めたので その子の顔色が 日に日に 赤く なり; 體が おひおひ 健に なつて きた。

かやうな無意識の内に 行つた 擦りつけの習慣が 年頃になれば 直に わざわざ 心からの手淫を 敢てし; 十六七歳より二十歳以上までは 血氣に任し、前後の考も なくして 一時の快感を 恣にし; 遂に 神経衰弱、近眼、脚氣、腸胃の病に かかる。幾十萬の男女學生が 種種の病に 犯され居るは 決して 勉強の爲ではない; 頭は 勉學の爲にあるものゆゑ 勉強すればとて 決して そんな 病氣になるもので ない; 人人の病氣は 大抵 食慾と色慾との 過度に失するより 起るものにて、攝生家に 病の取附く氣遣ひは ない; 予の如き 病に 冷淡な者には 近頃の流行風すら なつき寄らない。

手淫の害は ひとり 學生に於ける 學課の不成績に 止まらぬ; 永く ひいて、結婚後までも 夫婦の和合を 缺かしめ; 健なる妻との調節を保ち得ずして、憐むべき ヒステリーに 沈ましめ; 或は 幸にして 石癖たらしめざるも、時には 流産、時には 病兒の哺育に 一家の悲惨を 極めしむるやも 計り

がたい。故に 聖靈の宮たる身體を 神聖なるものとして 宗教上に 最も 貴び、衛生上に 深く意を用ひ、特に その局部を 常に 清潔なる冷水にて 洗ひ、しかも 七尺の褌を 腰骨より 臍下の丹田へ かけて、しつかりと 巻きつけ 締めつけ、所謂 腰に帯して 心の紐を ゆるめず; 一室に 閑居せず、惰眠を 貪らず; 勉學に運動に 向上の外に 寸分の隙を 與へぬのが 青年の手淫を防ぐ 良策である。

女に切
禮は? 聖書には 女の子を つばえるように 教へて ない。が 女の子にも やはり 蟲氣もある、手淫もある。故に 豫め 心せねば ならぬ。特に 女の子の大便の後始末を 等閑にしては ならぬ; 良いシャボンと微温湯とで 兩足の股を 丁寧に洗ひ、よく 拭いて 乾かした後で タルカム粉か 葛粉かを つける程にせぬと、割れ目の兩壁は 小便や大便で 極めて かめ易きゆゑ; しかも

大便の中の小蛆が いつしか 女寶の奥まで むぐり込み、むづむづ むづついて 手の利かぬ乳兒を むづがらせ、ぐづぐづと 泣きだだらせるばかり；漸くにして 手の利くやうに なれば、直に その痒き處に 指を入れて、穴を くちり、核を こすり、日 日 これも 男の子の如く、無意識の手淫を おこなひ、大に 健康を害するやうに なる。ただ 女の子は 男の子と違ひ、十四五歳にも なれば、まづ 月の巡りが めぐり；月月 身體を 新にするからでも あり、亦 男の子と その性を 全く 異にして なるから、手淫の害は 男の子ほどには はげしかるまいが それでも 十分に 親が 手當を せねば ならぬ。

子供が 指を しやぶる癖、大人が 鼻を ほじくる癖 いづれも 手淫の一種と 見て、防がねば ならぬ；それから ある女が 多量に 鼻血を出した月は その月の巡りを見ぬことも ありとか 聞いている。これも 一種の月經。

切禮の効 ユダヤ人が 生れて 八日目に その男の子をつばえる如く、我國でも 生れた子の臍の緒を 切るやうに その莖の皮を つばえねば ならぬ；生れて 一週の後 産科醫なり 産婆なりに 行はしむれば 何の造作なことも ない。

莖の皮を つばえてさへ おけば、その莖の溝頸に 臭い粕の たまることも なければ 蟲氣も おこらず；痒くも ならぬから 搔きたがりも せぬ；搔きさべせねば 神経をも 刺戟せぬ；神経さへ 刺戟せねば 無意識にも 手淫を せぬ；無意識の手淫を 知らねば 年頃になつても 有意識の手淫を いそがぬ。

おまけに 生れ落つるとから 男寶中の 最も神経の鋭敏な 莖の頭の皮が 強く厚く なつてるから、たどひ 少年となり、青年となりて、偶ま 晝の間 その衣服に こすれても 漫に刺戟を蒙ることも なく；亦 夜 睡れる間に 脊髓の暖まるに随ひ 莖が むくみ立つても、その夜具に こすれた計

りで、決して妄想に陥ることなく；況て聖い貴い白血の、その生命の精を もらす憂はない。

かねて手淫の害を蒙らぬこととて、その男實が健全なれば必ずその身體の全部が強壯である。身體が壯健であれば、結婚後に於ける天與の快樂は又格別で、爰に夫婦の愛情はますます濃ならざるをえない；そして一方には肉身の調節いよいよ圓滿ならざるをえぬ。この情と肉との融合あつて初めて末頼母しき子孫をも待設けられる、家庭の和樂も極められる、國家の隆盛も期せられる。

わが同胞中マシー系かとも見らるる男は二十歳前後には男實の莖の皮が自然にむけ出るの；女二十五歳頃男三十歳頃といふ結婚期までに、‘皮被り’と云はるる誹を免れるかもしれぬが；それでもその二十歳前後まで、或は知らず知らずに、或はわざわざ犯した手淫の害は手ひどく蒙つてゐるから；やはり凡ての男の子に

は生れて八日目につばえの必要が甚だ大にある。素より予の言ふ‘皮被り’はかの徴兵検査の折、軍醫などの言ふ例の‘皮被り’で、五千人か一萬人に一人のあの皮を割かねばむけぬ程の片輪者を言ふのではない；自由に莖のむくみ立つ時に、少も差支へなくむけ出しても、ただ常になえてをる間すつぼりと皮を被り居るその皮被りをつばえねばならぬ‘皮被り’と言ふのである。

第二講 性の教育

子供は人類史の初期 瓜の蔓に 茄は ならぬが、それに 孔子の子に 孔子の 生れぬのも 亦 不思議の一つ。世の中は 不思議づくめ；人は 到底 何一つを 知りぬくことが できぬ。その知りきれぬことを 學び、知らぬを 知らぬと 知るのが 智者のこと；そして 知らぬ物の数の 多いほど、知らぬ量の 深いほど、知らぬ区域の 廣いほど 智者で ある、賢人である。いくら 人智が 進むだとして やはり 廻り籠のコマ鼠に すぎぬ；進まねど 自分は 走る、籠は 廻る；故に 進めりと 思ふ。わからねど さぐる、進まねど 走る、その探る走るところに 人生の妙味が こもる；父母自身 獨力にて 子を 生み得ざれども 生めりと 思ひ；我自身 教へられねど 教へむと あせる。生み得ざるに 生み、教へ得ざるに 教ふる 此處に 親子の縁は ますま

す 深く、相互の愛は いよいよ 固く なる；喜もある、悲も くる。

親が 子を 己に同じと 見るは 誤り。生れし子は まだまだ 人類史の原始時代の劈頭に 立つて せる。子供が 五歳より十歳、十五歳より二十歳と 長するに随ひ、蒙昧時代より野蠻時代、暗黒時代より中世紀、近世より現代と 遷り變るものゆゑ；一人の子供の成長は 全人類史の縮寫に 異ならぬ。故に 時代時代の社會の状態や思潮をも 斟酌して、子供の教育を 施さねば ならぬ。現代 或は 五十年も七十年も 進み過ぎたる 親の考へを以て 原始時代や蒙昧時代の状態に在る子供を 律しては ならぬ。全體 子供は 凡て 自分本位なのを見のがしては ならぬ。それで 子供が 親を愛するといふのも、全く 己を離れ、己を捨てて 親を愛するので なく；親は 自分の有で、自分の一部であるから 之を愛するに とどまる。この遠い深い源からの 心理状態を 辨へおかねば 子供の教育

は誤りがちになるかもしれぬ。

子供には耳よりも目から 子供の教育は 耳よりも 早く 目より せねば ならぬ。 何程 やかましく ああしろ ころしろと 善い事を 口で 教へても; たまに 親が 何か 迂濶した事を すると 百日の説法 屁一つと なる。 人の目に 見せては ならぬ 事を 子供と あなごり; その鋭い目を 疎んじて、 思ひがけぬ時に 子供に すつばぬかれて、 無邪氣な 幼児に 赤耻を 加かされる事もある。 故に 最も 神聖に 最も 祕密に、 しかも 最も 嚴重に 守るべき 夫婦の 寢室に 於ては いかなる 幼児と 雖も 決して 同室すべきもので ない; もし 止を得ずして 同室するならば; せめて 夫婦と その 幼児との間に 小い 屏風でも 立てて、 仕切るが よい。

二十幾年か 前の事、 予が 米國に せりし時、 ある 富豪の 家に 働き居りし 知人の 話に: 或日、 その 家の 子女二人 相互に 抱き合ひて 室内に 戯れ居

りしゆゑ、 何を爲し居るかと 問ひしに; ‘私共は 父母ごつこを してるの’ と 答へたと 言はれた。 又 大阪で 生れた ある 子供が 未だ曾て 親の 教へたことも なく、 亦 見せたことも ないのに; 年 漸く 四五歳どかに なりて、 俄に ‘カツボレ’ を 踊り出したので、 家人一同 大に驚いて、 それか これかと 色々 考へ合すれば; まだ その子が 一歳にも ならぬ昔、 子守に 背負はれて 道頓堀を 通り往きたる事の ありたる由で; 其時 騒ぎ居たる 踊り兒等のカツボレが ちらりと 映りし、 眼底に 深く 潜み居り; その子が 今 漸く 手足を 動かすに 至るを 待ちて、 初めて その 手足の 運びに 現れ出たものと 見える; 鋭い目には 油断が できぬ。

世の中の 親達の中には その子に 酒を 飲ましたい、 烟草を 吸はしたいと 願ふ程の 物ずきは あまり 多く あるまい。 しかし 子供の 前をも 憚らず、 身の 保養にとて 二合の 晩酌に 平生の 眞顔を

くづし; 又 ちよいどの氣休めにとて、朝より夕まで 幾十本の烟草を くゆらし; その灰を散らしては 疊の上や本の上を よごし; その烟を吹き廻しては 自分の肺や氣管と 子供の目鼻を えぶし; 明暮れ 飲酒喫烟の實物教育を 憐むべき幼兒に 授けて せる。 かかる親の口より出づる衛生論が いかにも 強く明に 説かれても 子供の耳には 論より證據で、凡てが 馬の耳に 念佛; 心の底から 子供の爲にとて 語るどころの 勤儉貯蓄主義、雄辯なれば 雄辯なるほど、筋道が 立てば 立つほど、子供に取りては その論旨よりも 烟草の香が 鼻に附くもの; つまり 飲酒家や喫烟者は その愛すべき子を アルコール漬に したり、大切な身體を 煙製の肉にする如きもの; 悲まざるを えない。

又 子供には 常に 'うそをつくな' と 教へおきながら 主人は 例の もう五分 もう十分と 卑怯未練な朝寝坊を 恣にせる間際とて、豫て 約束せし 來客にさへ 接するを えず; どにかく 當意即

妙の頓智を とて、まづ '主人は 昨日の疲れか 今朝は 少少 氣分 すぐれず、まだ 臥せつて ゐますが、まあ どうぞ 暫く お待ち下さるよう' と 體よくかも 知れぬが、子供には 慥に 間が悪いは 悪いは、眞赤な虚言を 懶惰に加へて、雜りなき幼な心に 植ゑつけたものである。 しかも 己が日常の素行を 棚に上げ、時としては 子供の夜ふかしと朝寝坊とを 戒め; 又 子供が 何かの叱責か 處罰を 恐れて、絞り出した 無邪氣な遁口上を 詐欺罪に 問はむとする そんな親の教訓は 子供にとて 通るもので ない; 恰も 親蟹が 子蟹の横ばいを 詰りて、縦に歩めと せまり; 親猿が 子猿の無作法を せめるやうなもの; 言うて 甲斐なく、教へて 効なきのみならず、反て その子の嘲弄を まねき、反感を いたかしむるに すぎぬ。

素より 何もかも 悉く 子は 親を まねる者でもない; まして 家の外で する 子供等の遊び世界は 父母兄弟の家庭よりも 廣く 珍しいものか;

どかく 子供が 學校友達などに 化し易く 引かれ
勝ちでも あらうが、それにしても やはり 親の言
葉遣ひから 動作までが、期せずして その子に 活
寫しに 寫され居ることは 少も疑はれない。故
に 食物の如き 直接に 道德上の影響なき物でも、
子供の衛生には 宜しからぬ かの茶とかカピーと
か、唐辛とかベツパーなどは 少量ならば たどひ
大人の親に 害なきも、徒に 子供の前にて 見せび
らかし、子供に けなるがらして 食ふもので ない；
子供の手前 之を慎みて 避けるが 至當であ
る。何によらず 親として その子に 教へたく
のぞめる事 あらば、常に 口やかましく 繰返し繰
返す必要は ない；言はざるも ただ 親自身 之を
行ひ；日夜 その子の目に 照りつけおけば いつし
か その子の有に なる。孟母 三遷の教も、門前
の小僧 習はぬ經を讀むのも 皆 耳から 聞くより
も 目から 見るの 特に強きを 思はしむるもの
である。

子供は
英雄崇拜 小學校へ行くまでは 狭い家庭も 子供に
は 廣い廣い世界；その狭い家庭の小さい長は その廣
い世界の大きい英雄である、子供の崇拜物である。
自己本位、我身中心の 子供の心には その凡ての凡
てである；己よりも 大い者 強い者 賢い者は
父である。およそ 父ほどの偉い男は 世界に
二人となく、母ほどの善い女は 之も 亦 世界
に 二人とをらぬ。この偉い父が 何でも でき
ぬ事は ないし、そして 己の いふ通りに して
くれる；この善い母が 何でも 知らぬ事は ない
し、そして 己の 望むやうに して くれる；しか
も その偉い父 善い母が 己の有であるから 子
供は 父や母を愛する。しかし もし 己に反すれ
ば 最早 父でも えらく ない、母でも よく ない；
そして 己の有で なければ 決して 愛せぬ。
この邊の呼吸を 辨へおき、親は 子の崇拜の的と
なり居ると同時に、その子の味方で なければ なら
ぬ；まこと 自己中心の子供の氣分を 十分に呑込む

で、そして その子の心を 心と せねば ならぬ；
そして 親は 子をして 己を離れた 別の人のやう
に 思はしめず、恰も 親を 己の一部の如くに 思
ひ込ましむる位に せねば ならぬ。

規 矩 面 子供が 生れ落つると すぐから 食物の分
な 習 慣 量やら 寝る時刻まで 悉く正確に 守らしめねば
ならぬ。 飲まして ならぬ時や 食はして ならぬ
物を 子供が ほしがつて 泣くからとて 飲ました
り 食はしたり させ；して ならぬ事を ぐづるか
らとて させるから 悪い癖が つき；其後は 食ふ
べからず 飲むべからず 爲すべからざる事をも 恣
にしたいた時は 泣いたり ぐづつたりして 我儘を通
すやうに なる；一度 その手管に乗りし親は もは
や 親の權威を握り居られるもので ない；全く そ
の駄駄兒の奴隷たるに。すぎぬのみならず、駄駄兒そ
の者の將來に於ても 不幸 此上も ない。素よ
り 規矩面に嚴格に 育てると いうても 必ずし

も 時計の如く 秤量の如く 一切の事 寸分を違へ
ずして、その活ける子供を 無生の器物扱ひに せよ
と ではない；臨機應變の心掛は 時時 なければ
ならぬが、平生 家庭の暮し向には 決して ふしだ
らに 流れぬやうにその 締めくくりが なくては
ならぬ。

賞 罰 たとひ 子供が すべからざる事をして、爲
に 責むべく罰すべき事が あつても、親は 決し
て 怒つては ならぬ。 同じ悪さを 繰返せば 三
度目には 罰せねば ならぬが、罰するにも 怒つて
は ならぬ；怒れば 心の冷靜を 缺き、誰でも 正
當な判断を 失ふ。そして 暴暴しい怒り聲では
その教ふる事が いかにも 善い教訓でも 子供の耳に
は ただ 親の愚痴か 小やかましい小言に 響い
て；子供の 堅く閉ぢた心の底へは とても 入らぬ
もの；故に まづ 心を鎮め 聲を柔げて、靜に 子
供を 悟さねば ならぬ。 悟しても悟しても 従は

ぬ時は 先に言渡したる通り 體罰をも 加へねば
 ならぬ。しかし 體罰は 容易に加へては ならぬ
 が、いよいよ 加ふる段取に なるに 臀肉の腫れ上
 るとも 痛さを 身にしみる程に 打たねば なら
 ぬ。罰する前に まづ 子供に 小便を すませ
 せ、そして 臀を出させて 打たねば ならぬ; 打つ
 指の一節一節には 愛の力を込め; 打たるる子より
 も 打つ親の心の痛い涙を呑むで 罰せねば なら
 ぬ。二度三度の 親の忠告に叛いて、十分に 罰せ
 らるべきを 言渡され、かつ 自分も 覺悟の臍を
 固め居るに; さて 其時に臨み、故なくして 罰せね
 ば; 親は 己の言を食む者と 思はれ、子の前に 親
 の威信は ふるはなくなる。故に 賞罰は 最も
 嚴格に どこまでも 之を守らねば ならぬ; そして
 玩具 一つでも、お金 一錢でも 小さな約束で
 も 一旦 結びしからには 與ふべきは 與へ、取る
 べきは 取らねば ならぬ。子供なればとて 決して
 あやふやな答を したり、でたらめな手前を つ

くらうては ならぬ。初から 與へることも でき
 ぬ、亦 與へやうとも 思はぬ物を 與へようなど
 と ただ 一時 子供を なだむるために だまかし
 ては ならぬ。與へると 言はば 必ず 與へ、罰
 すると 言はば 必ず 罰せねば ならぬ。罰する
 にも 愛を以て 罰せねば ならぬ; そして 愛する
 にも 尙更 愛を以て 愛せねば ならぬ。罰すべ
 きを 罰せざるは 愛に非ずして あまやかして あ
 る; あまやかしは 子を毒するもので 最も忌むべき
 もの; 子を育つるに 親の 慎むべきは あまやかし
 に ある; 愛と あまやかしとの 似て非なるを 深
 く辨へおかねば ならぬ。

おどかし 怖い怖いは 不安より 出で; 不安は 不明
 より 来る。子供が 夜 暗い處を こはがるの
 は 何も 明に見えぬからの こと; 見慣れぬ獸など
 を おそれるのも 其が いつ 小さな事を する
 か 慥に知らぬからの ことである。たとひ 暗

い室の中でも 其處に 何も害する物の 無いのが 明なれば、誰も おそれは せぬ； いかなる猛獸でも 疫病でも 之を防ぐ道を 明に知れば 一人もおそれる者でない。故に 子供が 暗い處 見慣れぬ物を おそるる時には 懇に教へて その おそるるに足らぬ理由を 明に 知らしめねば ならぬ。まして 小さい子供が いたづらをするからとて、之を制するため、或は 餘りに泣くからとて、之を止むるため、そら おばけた、そら ワウワだ、そら お廻りさんが 来たとか、無暗に 子供をおどかして 凡ての物を こはがらし； びくびくと おち氣をつけては ならぬ。ただ 悪い事をして 罪をつくる外 世の中には 何一つ おそるべく こはい物はない； そして 神様にさへ 従うて 居れば、恵まれて 楽しく 暮らし居られるのを よく 教へねば ならぬ。

復讐心 '蜻蛉とり 今は どこまで 往つたやら' と

は 一人の慈母たる 女詩人の 亡き愛子を 慕ひし 歌で あるが； その優しい言葉の底の底に 沈むでる わが國民性かとも 悲まるる すさまじい 残忍な殺氣を 問はず語りに 漂はしてゐる。無邪氣で 天真爛漫で あるべく、花をも蟲をも鳥をも獸をも すべて 己が友とすべきに； 反て その遊び戯るるにも 漫に 生物を なぶり殺しにする その子供の 將來が 氣遣はれる、悲まれる。

のみならず、子供が 漸く歩き始めて； そして 机 或は 椅子に ぶつかるか、或は 猫や犬の耳や尾を むしりて、俄に 其等の動物に おどかさされし時、火の つくやうに 泣き騒ぐ その子を 泣きやましむるため、母たる親が 當の子を 悟さうとも 責めようとも せず； ただ その子の目の前に、罪も無き 机か椅子、猫か犬を うちのめす 真似をするか、或は 實際に たたくかして； 徒に 氣晴らし腹癒せの復讐を演じて、子供の眞髓を えぐりてまでも 一瞥の笑顔を 買はうと する； 心なさも 情な

さも亦甚しい。誠に親心あらば子供にもよく言ひふくめて、道理をさとせば；子供ながらに器物や家畜を大事にして、深くいたはり；決して其等を毀したり憎むたりする筈はない。然るに親が悪い手本を書いて、己の過を棚に上げおき、勝手に他を責むる復讐の悪徳を無邪氣な子供に早くより根深く植付けようとする；慎む上にも戒むべきである。

性の教育 子を育て、かつ教ふべき親の務は多くて數へきれないが、その内でも最も大切なのは性の教育である。が今日の如く我國一般に神聖なる男女の關係甚だ亂れ；最も大切なものを最も疎んじ、最も貴きものを最も賤みて、敢て顧みざるに於ては；この聖き性の教育を正當に施し得る者が少い上に、亦安心して之を弘く宜べ傳ふべき機も甚だ稀。聖き心と行とを以てして初めて聖きものを扱ふべく；然らざる色眼鏡

をかけてすれば物皆黒くも青くも見ゆるものと知られる。故に普通の文士が筆を弄すれば少青年の色情をあふり立て；又普通の醫者が男性の精蟲が何億、女性の卵子が何萬と無造作に數へ立つれば；人倫の大法にも人類の生生にも何等の崇高な價値を與へない。この腐れ果てたる社會の男女關係を清からしむるものはまづ未だ曾て古き悪習に染まらず、忌むべき穢れたる劣情に少も侵されぬ清淨潔白なる子供に聖き心と行とを兼ねたる者が聖き性の教育を正當に施す外に一の良き方法は更に無い。

教ふる可否 幼い子供に男女兩性の差や夫婦の間柄の事など教へて；反てその子供の性慾をおびき出しはせぬかと危む者もあるが；それは全く從來の悪習に染み淫亂のみを男女の本能と心得をり、舊思想に目をくらまして居る間の迷にすぎぬ。然るに一方には亦かかる問題は決し

て教ふべきものでもなく亦教へらるべきものでもない；全く子供の成長と共に自然の成往に任しおけばよい；或るべく之を祕密にし、敢て一言も之を口にすべきものでないと言ひ張る人人も割合に多い。しかし生物界の活躍は時時刻刻最も切實に明確にこの活問題を少年や青年の目に見せつける；大人こそ目を塞ぎ、老人こそ目もくもれ、少年や青年の目は開いてをる、輝いてをる；目を横ざる何物をも見のがさぬ；たとへば蠅や蜻蛉の尾つながり、鶏や鳩の負むば、猫のナアロン、犬の衢芝居の如きひしひしと子供の目に映る不思議な現象にその智識慾は抑へきれぬ。その盛な好奇心に満足な答を與へないで子供は徒に承知する者でない；親が教へねば誰か他の者にたづねる。故に教ふべき時に親が教へねば教ふべからざる時に教ふべからざる無智な召使が或は悪さ盛りの遊び友達か之を穢い變ないかさま事のやうに

尾に花を咲かして教へ込む；それが最も恐るべく最も危険至極である。

同じ正宗の名刀を子供に持たしおくにも、此は貴い珍しい而も鋭い刃物ゆゑ大に氣を付けて持扱はねばならぬと教へおけば、深い傷を受くること少く；之を教へおかねば大怪我をする。又ダイヤモンドの寶石なのを知らなかつた數十年前のアフリカの子供等は、その幾百萬圓と云ふ寶石を惜氣もなく旅人に與へたり、或は投棄て、或は踏附け、至つて粗末に取扱つた。凡そ人は無智にして、物の眞の價を知らねば此を粗末にし；よくその價を知れば此を大切にして貴ぶ者である。何事によらず、無智ほど損失を招くものはない；日本の今日の如く女の地位低く、男の貞操亂れ；男女關係の穢れ居るは畢竟男寶女寶の神聖なる價値を知らぬからのこと；性の教育を怠つてはならぬ、忘れてはならぬ。

いつ誰が
教ふるか 人に 男女の両性ある以上、その性の 互に
相引き、相慕ふべきは 人の本能で あつて; 所謂
戀愛には 殆ど無意識なる 幼児に於ても その遊び
戯るる間にさへ 打消されぬ事實で ある。 この生
物本能の引力を 悪く用ふれば、人も 禽獸に劣り;
之を 善く用ふれば、人は 萬物の長として 貴まる
べき者で ある。

さて 斯る大切な問題を 子供に 何時頃 教ふべ
きかと いはば、早きに 過ぎても ならず、遅きに
失しても ならぬ。 早ければ 豚に 眞珠を投ぐる
の損あり; 遅ければ 悔いて 及ばぬ 害が ある。
されど 子供の成長や性質が それぞれ 違つてゐるの
で、必ず 幾歳の時に 教ふべきものと 定むる譯に
は ゆかぬ。 ある子供は 年に優りて 智慧 頗
る ませ; ある子供は 年に後れて 甚だ未熟なの
がある。 故に 何にても 子供の教育は 進む
で つめ込むと 云ふよりも、まづ 退いて 答へる
と 云ふ方針を 取るべきものと 思はれる。 たゞ

へば 乳を飲まずにも、その飲むべき時 到り、乳を
飲みたければ 必ず泣くが; 未だ 時も 來ず、泣き
も せぬのに、しいて 乳房を咬へさしても 乳を飲
むもので ない。 それと同じで 子供が 問ひも せ
ぬ、望みもせぬ事を むりに教へても 子供は 覺え
てる者で ない。 いやがる乳を飲ませば 反て 胃
や腸を 損ふごとく; 好まぬ事を教ふれば 反て 害
に なる。 その乳も 牛の乳は 牛の子に 適し、
山羊の乳は 山羊の子に 適し、そして 乳母の乳は
乳母の子に適しても その貰ひ乳の子には 宜く ない。
生みの親の乳は 生れし子に 最も適當で、そ
の子の成長する月日に應じて、その子に必要な 滋養
分を ますもので; 親の乳と その子の成長とは 寸
分 たがはず 釣合つて ゆくから; 子の食物として
は 生みの親の乳に まさる食物は ない。 その通
り、性の教育を 子供に授くる者も 亦 親より外
に 適當な者は ない; 子守や 遊び仲間や 學校友
達は 未だ その性の 貴い事も 聖い事も 知らぬ

から 勿論 教へる資格がない。そして 幼稚園の保母や 学校の教師など 聊か その眞の價を知れる者でも 血を繼がぬ 師弟の間柄と 云ふだけでは とても 子供の心に しつくりと 食ひ入つて 性の教育を授けることが できかねる; しかも その時を待たずして 子供等は すでに 早く 無智の召使や 悪い遊び仲間などより 性の曲解を 試みられて しまふ。故に そんな 取返しの つかぬ羽目に 落込まぬ前に 親が 十分に 懇に おごそかに 性の教育を 多く 愛する子供に 授けねば ならぬ。

どうして 教ふるか ‘おかあさん! 僕 おかあさんのお腹に ゐ たつて、どこから 生れて 出たの?’ とは 子供が 親に 問ひかける 重大な人生の難問である。そして 是迄に うるさいほど 色色の事を 幾度も 問ひ、幾度も 聞いた; しかも 丁寧に やさしく 教へて くれた。しかし 是迄の問題は 今 己

が 小さい心に わたかまる 問題に くらべては さしたるもので ない。‘僕は どこから 生れたのか しら; おかあさんの口からか? でも 口には 歯があるから なあ! さて どこから 生れたのか しら! そう そう、おかあさんは 何でも 教へて下さる、そして 何でも 知つてなさるから 聞きますせう!’ と 自身 堅く 心を定めて、眞剣に 尋ねる: ‘おかあさん 僕 おかあさんの 何處から 生れ出たの?’

この思ひがけぬ奇問、しかも 人生の最大事實、母親も 不意の難問に はたと 當惑し; それとは 明らかさまに 言はれもせねど、なに 高が 子供の事と 思ひ切り、その場の遁口上に、當意即妙の ‘お臍からよ’ と 答へる。その無造作な答が 無慈悲とも大逆とも 言ひ盡せぬほど 其子の一生を誤り 親の威信を 根こそぎに 失ふやうになるかも知れぬ。でも それとは 知らぬ 無邪氣な子供は ‘ふむ そう! と あやふやな 返辭で 解つたやう

な、解らぬやうな顔付で、其場を濁され終るも；後日又又心の深い不審さに堪へられず、‘でもおかあさん！ どうしてそのお臍が裂けて仕舞はないの？’とたたみかくるその鋭い子供の問に、更に窮せる母親は又一策を案じ出し、‘實はお腹がさけて’と答へ；お腹のたるめる皺の白い筋目を示して、子供を烟に巻かうと試みる。が子供には素より命掛けの大切な大問題であるから容易にごまかされぬ。‘お腹がさけたら胃袋も百尋も血も皆飛出よう、とてもおかあさんは生きてをれまい’と思ふので；それからそれへと根ほり葉ほり、うるさくひつこく突込んで聞く；窮すれば窮するほど母の答がちぐはぐになり；はては子供に揚足を取られて、じれるはずみに怒り氣味をおぶるきわどい所まで無邪氣な子供に問ひつめられて；思はず面を赤らめる。それと見た子供は己が知識慾の満足を得られぬ上に、母の曖昧な答よりし

て；さては無智なるか不深切なるかと疑ひ；その赤らめる面を見ては、母の心に何か後めたき、耻しむべき、賤むべき黒い影のまどひ居るかを怪みかける。今が今まで、すべて何事をも知れりと思ひし親の智慧も浅いものか、いや實際生んで、知り居る事をも教ふるだけの愛がうすらいだのか；或は教ふるさへ耻づる行を敢てしてるかと自身問ひ自身答へて；爰に親子の間に隔りの戸をたてかける。抑もその刹那に親子の愛情はけづり落され；人生の不幸は芽を出し始める。親たる者深く深く心せねばならぬ。

その教へ方 人の身體は聖靈の宮であり；特にその生殖部は聖殿の中の至聖處であることを堅く信じ居らぬ親はとてもその子供に性の教育を授けることができぬ。いかなる清い物でも汚れた手で扱はるればきたなくなる；男女の貴い

男賓女賓でも、それを 賤い心で 思ひ、穢らはし口で 語れば 汚れて しまふ。故に 子供に の教育を授くる者は 十分に 神聖な嚴肅な信仰に 立ちて；恰も 古の わが武門に於ては、その子孫の 繼續を祈りて かの金勢大權現を 拜み；或は エジプトやロマに於ては かの神殿などの戸口を 女賓に 象どり、出入の際にも その玄妙不思議な 人の生れ處を慕はしめたやうに；それほど 神聖な しかも 神祕な事實で あるだけに、その清い心の子供に この大切な 性の教育を施すに當りて；塵ほども 濁れる思を 挿むでは ならぬ。

花の例 ‘おかあさん！ 僕 どこから 生れたの?’ と 問はれたら、まづ ‘後から 靜に よく 教へて あげませう’ と 答へおき；深く考へ、十分に 手廻を しておいて；さて その子を 一室に 招き、己が膝に だき寄せて、靜に 神に祈り；それから まづ 梅なり桃なり 又は 其節の草なり、何に

ても 手近な花を採り、その花瓣に包まるる 雌薬と 雄薬とを しめし；雌薬の蜜と 雄薬の粉との接觸；その接觸よりして、雄精が 雌薬の中を つたひ下り、萼に藏められ居る種子に 入りて おちつき；成長して 熟し、熟して その種類を 後に のこし；ますます 殖えしげる道理を 教ふるのを 初めとして；次第に 一段と 上級の生物に 説き及ぼすが よい。そして 蠅、蜻蛉、蛙、金魚、鯉、雀、燕、蛇、龜、鼠、雞、猫、犬、牛、馬と 上へ上へと 人に 説き上らねば ならぬ。

雞の例 一の卵を わりて、茶碗に いれ；その白身と黄身とを 示し；その白身が 雞の骨や皮に なることを つげ；さて その白身の中に 特に ざろりと 筋だつた 小さい固まりを 取り；その固まりが 牡雞から 來た 雄精なのを 知らしめ；この雄精の ない 卵を 牝雞が 生んでも 其は ‘草卵’ と 稱へられて、いくら あたためられても、可愛い

雞には ならぬ; 末は 腐つて仕舞ふことを 教へる。

又 同じく 卵で 子を生む動物の中にも 龜の類、或は 遠いアフリカの駝鳥などは その卵を 暑い砂の中に 埋めおけば そのまま 太陽の熱で かやされるが; 大概の鳥は 親鳥の羽で だきぬくめられて、皆 雞のやうに 雛となる。しかし 卵で 生れないで、親の形で 生れ出る者も、初め 皆 腹の中で、雄の精が 雌の卵に 吸付く當座は やはり 卵の形で あつたのが、永い永い間に だんだんと 親の形に 發達し、いよいよ 生れ出る時には ちやんと 親と同じ形の子に なつてる。そして 人は 諸の動物の中で 一番 上等で あるから、まあ 幾億と數かぎりも ない 生物の中でも 割合に 永く 母親の腹に ゐて、そして 生れ出てからも 一番 永く 乳を飲んで、一番 永く 育てられて、一番 永く 教へられて、やつどのこで 大くなるので、人ほど 其子が 永く厚く その親

の世話に なる者は 外には ない。人として 親子の間柄の 最も親しいのは その親の苦痛が 他の動物よりも 非常に烈しかつたからである。

人の例 牝雞が 卵を お臀から 生むやうに、人の母親にも 子を生むべき 生み口が 女寶の中に ある。言ふまでも なく、子を生む時は 何にも 比べやうの ないほど 人の最も痛い苦を するのであるが; 母親が 子を生む時には、その女寶の筋が のび、口が 開いて、怪我を せずに、子を生まれるやうに、神が ちやんと 女の身體を 造つて あるから; 常に 身體を 大切に養つてまへ おけば、少くも 怪我を せずに 子を生んで、生んだ後で、又 筋が ちぢみ、口が すぼむで、元の通りの身體になる。かやうにして 誰でも 子供は 皆 母親の腹に 四十週間も ゐて、生れてからも 尙 母の乳を 五十週間 飲んで 育て上げられたのだから; 決して 母の恩を 忘れては ならぬ。

‘太郎! お前も やはり おとうさんの精が おかあさんの お腹の卵と 結び合つて 一人の身體になり; 十分に 熟して, もう 外へ出ても 大丈夫な時に 神様からの生命が やどつて, おかあさんから 別れ出たのよ. そして この乳を 飲んで, 今 こんなに 大く なつたのねい! 大い 善い子に! お前の髪 一筋も, 血 一しづくも 皆 おとうさんや おかあさんから 譲り受けてるのだから 大事にすることよ! 大事にして もっともっと 大く なつて, おとうさん (女の子ならば おかあさん) のやうになるまでも, 一生 死ぬまでも, 死んでからも 永く永く 愛し合ひませうねい! ほんとに 可愛いこと! おとうさんや おかあさんの 生命の緒なの!’

かく のべ聞かせば, 子が 親を思ふ情を 一層 深くして, ますます 敬ひ愛するやうに なる.

なぜ教
ふるか 人が 子を生むのは 決して 人の戯で な

い, 全く 神の御事業で あつて; その大事業を勤むるには 男女 ここに 夫婦と なり; 聖靈の宮たる 身體の しかも その至聖處の女寶と男寶とに於て, 生命の心血を注ぎ, 初めて 之を 神聖に莊嚴に 全うすることが できる. この高遠玄妙なる天の理を まもり, 純正至愛なる人の道を行ふよう; 生れ來り, 存へ往くべき 人の子に; 未だ その心の 穢れぬ前から 深く正しく 教へ込まねば ならぬ. 一旦 この男女兩性の神聖なるを 悟らば, 敢て 之に 下劣 極まる痴情を 寄することもなく; 夫婦の操行を 賤ましむる 誤解もなく; 淫猥なる枕草紙や, 共同便所の障壁, 神社佛閣の柱扉に 畏れ多くも 勿體なき樂書は 必ず 跡を絶ち; 妾宅や圍ひ者 公娼の遊里なども 遂に取拂はるるに 至らう.

我が社會に於ては, 今も 尙 男女兩性に關る 目の著け方を 誤れるため; ‘男女’ と 云ふ名詞のみにて, 直に 陋劣なる淫慾の亂行かと 思ひ込ませる. かくて 宗教上 最も崇高なる, 社交上 最も

親密なる 衛生上 最も健全なる 夫婦の操行、人倫の大道を、これほどに 賤しく思はしめ、恥しく考へしむるに至りし 古來の悪習は 昨今 猖獗を極め居る疫病よりも 恐るべく、忌むべきである。然るに 我國の醜業婦等が まだ 旭の御旗の かざしやらぬ 世界の隅隅までも その紅裙を翻して、全國の赤恥を 世界萬國に さらし居るのは；抑も 何に基するかと 言はば、單に 男女兩性の神聖を 穢して、之を 淫慾の亂行に 變へたるためと 言はざるを得ぬ。しかも その一旦 穢したる性の事とて；今は 容易く 子供に教へられも せぬほどに、親の苦悶 予は 黙し見るに 忍びぬ；故に 之を元の聖に 取返して、聖そのままに 之を 子供等に 教へさせたい。

性の神聖を教ふれば、子孫繼續の爲を思ひて、少年や青年の手淫も やみ；少年や青年の手淫 やめば、蓄妾や公娼の淫風 やみ；蓄妾や公娼の淫風 やめば、家庭の亂行も やみ；家庭の亂行 やめば、夫婦

の和樂、社會の安康 期して待つべきである。

婚禮の世には 婚禮を 人生の大典として 表面にのみ 虚儀を てらひ、大金を かけて、祝賀 至らざるなく、盡さざるなきに；しかも その大本たる 夫婦の性交をば 賤むが如く、忌むが如く、恥づるが如く、遠慮に遠慮、氣兼ねに氣兼ね；祝ふ者にも 嘲り 半分、祝はるる者にも 耻 八分；かくても めでたかるべきか、或は めでたからざるか；滔滔として 天下に行はるる風俗の儀禮祝賀なるものの 眞の意義 果して 那邊に存するか；予は 之を知るに 甚だ迷はざるを えぬ。之とてても その罪の源を尋ぬれば、その子供等をして、幼き時より、その男賓女賓の いかにかに貴むべく、いかにかに 慎むべく；人生の幸福は 全く 此に基き、社會の禍亂も 亦 全く 此に始まるを 思はしめざりし、即ち 性の教育を 正當に施さざりし所以と 悲まざるを えぬ。婚禮をして 人生の大典と 悟らしめ、ひいて 國家隆盛の根

抵たらしめむと望まば; まづ 何は しておき, 弘く 幼児に 性の教育を 深く施さねば ならぬ。

日日の食物は 身體を養ひ, その生活を 樂むため; 定めたる時に, 定めたる處で 食はねば ならぬ; 時ならぬ 撮み食ひ, 處はづれの 盗み食ひは 罪である。男女の性交も 相互に 身體を守り, その人生を全うするため, 婚禮の大典を擧げし時, 妻たり夫たる者のみが その聖業に與らねば ならぬ; たどひ 約束あればとて 若き男女が 勝手に むぐり合ひ; 或は 私妾や公娼などこの淫行は 更に大なる罪である。天の定めたる一夫一婦の倫道は 姦夫淫婦の 少も侵すべからざるものと 深く 子供の心に 植ゑつけねばならぬ。しかも 懇に明に 教へたる上, さて 此等の教の 最も神聖 かつ 祕密なるものゆゑ, 決して 他人に 告げては ならぬ; かの 十誡の第三誡に '神の名は 聖きゆゑ 汝 漫に 之を唱ふべからず' と あるごとき; この男實や 女實など 男女の性に就ける問題は 凡て 神聖なる

ものゆゑ, 決して 人 之を 漫に徒に 語りては ならぬ と くれぐれも 子供を 戒め悟し, いやが上にも 慎ましめねば ならぬ。

第三講 食料問題

女の天職 今の文明は 男本位で、凡ての事が 男次第; 所謂 男世帯の片輪文明に すぎぬ。喧嘩すきの 暴くれない男に 世界を 搔廻さして あるから; 意地も はる、奪ひ合ひも する、戦争も する。さてこそ 女の やさしい心で 男の あらい心を なだめ、女の 柔い舌で 男の こわい舌を まき、女の 小い手で 男の 大な手を おさへねば ならぬ。

しかし 近頃の 新いとか 覺めたとか 云はるる 或女の如に 男と同じやうに 考へ、男と同じやうに 語り、男と同じやうに 行はうと するのは 間違である。女が 男のやうに なれば、それこそ 元の暴い男に 更に 更な なり損ねの男を 加へるやうな もので; 即ち 妙な動物の團體が できる。女が 己の天性や本分を忘れて 男の舞臺に出

ようとするのは、恰も 謀を 帷幄の中に巡らすべき大將が 輕輕しく 陣頭に立ちて、狂ひ廻る猪武者の愚を まねるやうな もの; 勞して 効の少い 犬死にも 劣る。女の位を 眞に高く し、女の價を 眞に貴く するには 女の天性を 十分に 發揮せねば ならぬ; 漫に 男を まねるのは 全く 女の自殺である。女は 女であつて 男でないところに 女の價がある。女は 素より 男の下にあるべき者でも なければ; 亦 男の上にあるべき者でもない。神は 人の上に 人を造らず; また 人の下にも 人を造らない。男は 男として 貴い通り; 女は 女として 貴い。男が 女らしく なければ 人たる男の價値 なく; 女が 男らしく なければ、是亦 人たる女の價値が ない。

近頃のやうに 徒に 表面のみの改造を 叫むで、人の内部の心の改造を 思はぬ時とて; 女も 天性に 叛いて、男まさりの活動など 思ひ違へ; 電車の車掌とか 運轉手などに なり下れるを その地位の上

進、婦人問題の解決と心得をるらしい。いかに女が男と競争しても、腕力はとても男には勝てぬ；體量は容易く男をこへられぬ。體力以上の智力に於ても、今日まで男の開いた男標準の研究界に於ては或は男に及ばぬかも知れぬ。で予の望むところは今更決して男の真似をせず；女は女として、女を本位として、女の本性を發揮し、女为天職を全うしてもらひたい。素より女として男と同じく人であつて、他の別な動物でない以上は、男と同じ通有性はあるにしても；全然女の本性を忘れてまでも；一方には男の奴隷となり、一方には男の地位を侵してはならぬ。現在の女學校の教育の如き、大大的に改良を加へ、女を女として、女に必要な學問だけを教ふるようにしてほしい。

醫學の研究
 ‘エフ’といふ名は‘生命’といふことであつて、生命を生む生命は女に頼らねばなら

ず；その生命を育て教ふるのも亦女である。その生み方、育て方を研究する方法を深く女學校で教へねばならぬ。生理學、病理學、藥石學、兒童心理、育兒法等を十分に研究し；此等の研究に於て、是まで男の達し得ざりし深い處までも女が開拓して進まねばならぬ。男は女でない以上、到底女の氣分も明にわからねば、亦何事も女の見方に見ることができぬ；そして男の見落せる分にして女の目につく眞理は幾らもあるに違ひない。そこに女が目注いで、男の缺けてる分を補ひ、凡ての點に於て男を助け、兩兩相待つて、後に完全を期してもらひたい。

是まで永い間、男は女をいちめ通して、片輪者日影者としたその報酬として、男の補助者たるべく伴侶たるべき女が無智無能の今日；反て男の手足纏ひとなり、厄介者となり果て；たとひ一億の人口を有する國にても五千萬人の男の働

を五千萬人の女が妨げ居るとすれば、實は一億の無能な群衆に異ならない。故に予はわが國の女學校に於て、今一層の廣い意味に於ける醫學科を設けて、廣く深く生物學や生理學や心理學を多の女學生に教へるようにしたい。

料理科 廣い意味の醫學科の外に、更に廣い意味の料理科をすべての女學生に習はしたい。今の女學校の料理法といへば、もし日本の料理法ならば口取なれば何と何、お吸物はどうか、古來の水澤山な飲物がちの御膳立か、或はもし西洋料理ならば、パタ 幾サジ、砂糖 何匁とか、ただ舌の先の甘味を主にしてるやうに思はれる。そしていかなる體質の人にはいかなる食物、いかなる氣質の者にはいかなる飲物とか、肝腎な滋養素などどれだけあの魚鳥やこの野菜に含み居るやを教へず、全く料理學の原理を誤つてをる。

全體人が病氣とて怖れ嫌ふその病氣も實

は病菌が唯の一分に、自身おちける神經が九分である如く；醫者や藥の如きもそれほど實際の効能はあるものでない。實はその醫者や藥の効能はたつた一分に當人の信仰が九分；‘汝の信仰 汝を救へり’とは耶蘇の聖言である通り、罪人の救はれるのも病人の直るのも全く信仰の力が主である。

或處である若者等が船遊びに或島まで渡らうとして；其中の一人がいつでも必ず船暈に苦むのを思ひ出し；その仲間を幸ひ一人が藥種店に勤め居るを利し；藥でもなく毒でもない無効無害なる水藥を製し；さてその船暈請合の一人に向ひ‘此は獨逸の大醫スベルトコロブ氏發明の妙藥で、いかに船や汽車に弱い者でも、一滴此を飲めば決してゑふことはない’と言うて、飲ましめしに；果して三里の海上無事に目當の島につき、楽しく終日遊び暮らして；さて歸るさ、その妙藥の効能餘りに著しきおか

しさを抑へきれず、遂に「君 あれは ねい 僕の つくつた 甘い水で スペルトコロブ氏のも 何でも ないよ」と白状したので；歸途 海の 少も荒れざるに、前とは うつて代つて、船に乗るが 早い か その妙薬も きかばこそ、忍ひに 忍うて 病人 同様の苦を 蒙つたこの ことを 聞いた。

又 予の 親い人に 肺病の第三期とか 第死期とかに 入り、須磨の別荘に 静養し；湊病院からとか 毎日 専門の名医が 來診して 居た。或る日のこと、其人 醫師に向ひ「その注射で 病が 直りませうか、正直に 言うて下さい」との 尋ねに；醫者も 虚言は つけず、兼て 其人の 氣質をも 知れることとて、包まず隠さず「いや 實は わかりませぬ」と 答へた。すると 其人は「さうでせう、薬や醫者で 病氣が 直る位ならば 死ぬ人は 世の中に これほど 多くは ありますまい。よろしい、注射も飲薬も 入りませぬ；ただ 毎日 あなたの暇を見て 一時間でも二時間でも 碁を打ちに 來て下

さい」と 約束した。そして 毎日 醫者相手に 碁を圍むで みた。すると 或日のこと、その醫師が その人に向ひ、決して 海に入らぬよう 特更に 氣を附けた。そこで 旋毛曲りとも 思はるる程に 負けぬ氣の男とて；翌日より 醫者には 隠れて、初めは 足の踵まで 二分間か 三分間づつ 一週間；其次は 膝まで 四分間か 五分間づつ 一週間と いふ工合に、次第次第に 時を長く 身を深く 海に入れ；終には 幾週間の後 ざぶざぶと 泳ぎ；さて これで よしと 済まし切つた顔をして；その翌日 醫師に 脈を見せ；醫師の驚くばかりに、死期の肺病を 海中へ 洗ひ流し；十數年後の今は 七十の若翁として 壯者をも凌ぐ元氣で 毎日 働いて をる。その人の信仰に よれば、肺病は 決して 死なねば ならぬ 難病ではない；肺病の療法には 新しい心と 新しい空氣と 新しい水とを 用ふれば、必ず なほるもの と 言うて をる。其通りで、凡ての病氣は なほる筈で ある。

ひとり 病ばかりで ない; 飲食物の如きも 全く その信仰次第で、その本質の滋養分は いかにか豊富であつても; 苟も その養素を 疑ふ者には 決して 營養には ならぬ。故に その養素を 養素として 明に 知らせしめ 信せしむる その道を 講じて、女學校に 正常な飲食學を 教へるように したい。病を得て 後、初めて 醫者よ 藥よと 騒ぎ立つのは 抑も 無智の極である。古の 戦はずして 勝ちし 良將に ならひ; 病まずして 健に 身體を養ふ法を 取らねば ならぬ。その病まずして 養ひ、藥代を以て 美味を買ふ法は 第一 飲食物の養素を しらべ; 昆布や ヒジキの海草は 磷素を含み居りて 腦髓を養ふに よいとか、大根は デアスターゼを有して 消化を助けるとか; 魚の尾の一端、木炭の一片、あれは 骨に よろしく、此は 血に よろしとか; 女の こまかい頭や やさしい心や 美しい目や 細い手; 藝術的には 形や色の配合、衛生的には 味や質の加減; いかにか 乾燥無

味な 化學的の分析表でも 女の頭と手で 調節すれば、頗る興味深い 學課と 成り; しかも それが 娘として 妻として 母として、一家の和樂を きたし、一國の隆盛を いたすに 違ひない。

男の學校は 徴兵猶豫など 悲しい苦しい馬鹿馬鹿しい特典があるので、文部省の劃一主義に 虐げられるのも 止を得ぬ事として; さて 幸に 徴兵に關係の無い 女學校までが 何を苦むで 幾多の片輪女を 造り居るか、怪しきこと 沙汰の限りである。何故に 國漢文や其他の不用な學課を廢して; 有益な活きた學問を 教へざるか。今日 一廉の女學校を卒業したる娘として、米が いかにして 造らるるかを 知らず; 妻としては 性の心理作用を辨へず; 母としては いかにか 子を生子を育つべきかを 心得ず; その常識に缺けたる者 我國の婦人の九分通りとは、實に 歎きても 悲みても 尙 餘りあり といはざるを得ぬ。

食物の價 凡ての生物は 生命を 愛する。 中にも
人は 最も 生命を 愛する。 故に 人は 死して
も 尚 生きむとは する。 そして 生き存へよう
とて 飲み食ひ; 社交を好むで 子孫を のこす。
人間萬事 生命が 本で ある。 その生命を養ふ食
物の 貴いのは 言ふまでも ない。

さて その食物の 生命を保つに 最も大切なのは
ど 實の價が 高く、金の價が 低い。 又 その
生命に必要な物ほど 品切れに なつては ならぬ。
故に 我等の生命に 無くて ならぬ物は 何時でも
何處でも 誰でも 自由に 十分に 得られる。 た
とへば 空氣は 我等の食物の中で 一番に大切で
ある; 故に 何時でも 無一文で、寝てる間にも 吸
はれる。 空氣の次は 光や水で あるが; 光は 晝
だけが ただで、夜は 金が いるし; 水も 水道税
や運搬費が いる。 いづれも 水には その費用の
必要な だけに 生命には 空氣ほど 必要で ない
ことが わかる。

其他 飲物の内でも、茶やコーヒーや酒は 水のやう
に 必要で ないから その必要で ないだけに 金
の高が かさばるし; 食物の内、魚の如きも この
正月に 神戸の友人の處で マグロ百目に 二圓八十
錢も 拂つたと 聞いた。 その高いマグロに 果し
て 二圓八十錢の滋養分が 慥に あるかと 言は
ば、決して さうは ない。 一疋 一錢の干鰯か
五錢の鹽サママの方が 反て 眞の價を もつて を
る。 又 腦を養ふ海草の内、これも お歳暮最中
に 一枚の價が 七錢五厘まで 上つた 乾海苔より
も、一つかみ 五錢のヒジキの方が その量に於て
も 質に於ても その一枚の乾海苔よりは 數倍の價
がある。 牛肉の如きも 百目 一圓五十錢の 高
いのを 買へねばとて、予の如き 高等貧民は 別
に つぶやかない。 百目 僅に三十五錢位の 筋だ
らけの肉を 味噌で 煮さへすれば 柔にも なり、
味も よく、養素も 多くて 至極結構。 骨でも皮
でも 凡人の 棄てる物ほど 味が よく 滋養が

多い。神の恵む價と 人の見積る價とは 違ふ。

故に 予は 信ずる：物に 眞の價の 高い物ほど 金の價が 低い。そして 生命を繼ぐに なくてならぬ物ほど 神は 誰にでも 何時でも 何處にでも 澤山に 備へて ある。

國民の 主食物 國民として 食ふべき 主なる食物は その 國に於て 最も多く生ずる物で なければ ならぬ。人でさへ 親として その子の 生れる前には、凡て 入用な物を 豫め備へおくでは ないか。まして 神は その國民の 必要な物を 悉く その國土に 生せしめぬ筈は ない。故に わが國民の主食物も 言はずして その産額の 最も多い米で なければ ならぬ。そして 麥豆などの穀類を以て 補ひとし、野菜菓物魚介等をも 副食物とするが よい。素より 常に 食すべき 主食物には 次の三大要件が 必要。

第一 口に うまさ事。

第二 養素に 富める事。

第三 金の 多く かからぬ事。

それ いかほど 口に うまければとて、滋養分が 伴はねば 日常の食物として 生命を支へることが できぬ。又 いかほど 養素に富めばとて 口に うまからねば 全く 藥も同様で、とても 毎日の食膳を たのしむ譯には ゆかぬ。又 いかほど 口にも うまく、養素にも 富めばとて、餘りに 金の かかる物は、金持の外 大多數 普通の家庭には 常食として 整へられぬ。そこで この三大要件を 供へる物は、我國では 何かと いはば それは 言ふまでも なく 水田の米。米は 口に うまく、養素 ゆたかに、金の價も 亦 割合に やすい。故に 我等の 常に樂み味ふべき 主食物は 慥に 米で；米の外に 米ほどの物は 何もない。米、水田の玄米！ 此が 我等の貴い生命を 養ひ支へる 最も貴い食物で ある。

玄米 玄米の成分は 水 一四、蛋白質 八、脂肪 一、澱粉 七五、灰分 一、木繊維質 一とかいふことであるが；この人の調べた分析表は どれも 當にすべき 正確なものではない；此外に 我等の生命を養ふに 最も大切な ある貴い養素が まだまだ あるに 違ひない。全體 凡ての自然の物には 人が 捕へられぬ エネルギーとか 活素とかいふものがある；そのエネルギーや活素は 顕微鏡でも 見えず、分析秤にも 加からぬもの。米の如きも 自然のままの玄米を 食べば このエネルギーも活素も、糠として 棄てらるる あの芽やら粉の中に含まれて なるから；我等 毎日 玄米の飯を 食ひ居れば、生命を養ふ養素の七分通りは 既に 充たされてる。そして その残りの 三分足らずは 種類の副食物で 補へば よい。この口に うまい、養素の 多い、金の やすい、玄米ほど 貴い食物は 此國に居る 我等のため 又と 外には ない。玄米飯の香だけでも 七十五日 生きのびる。

しかも この 貴い玄米を 元祿の頃からでも あらうか；世の中が 贅澤に流れ、目に白く 美しい物をこの虚榮に 走つてから、米を磨いで 粕の白米とし；米の中の 最も貴い部分を '糠' と いうて 棄て；残りの澱粉 即ち 糊だけを集めて 飯とし；その飯とせる 白い粕を 食ひ來りし 悪い結果として；爾來 鬼上官の加藤清正のやうな 智勇兼備の武夫の外は、大概 脚氣の病に侵され；わが同胞 今日的大部分は 論より證據、胴體の長さに 足の長さ 釣合はず；爲に 坐り居れば、さほど 不格好な姿とも 見えざるに、立てば 忽ち 外國人に比べて さながら 一寸坊の觀を呈するほどに、丈 低く、何の見榮えも ない。これ 畢竟 粕飯の中毒で、足が 萎え縮み、慢性の最も慢性な脚氣に かかり居る證據。神の 與へし。純な玄米を 人 徒に 白米に變へし 靦面の天罰と 思はねば ならぬ。

肉食 米國に往けば 米國の食事；英國に往けば 英

國流、支那に往けば 支那の食物を 食はねば ならぬ。その國國の氣候風土に應じて、衣食せねば ならぬ。それで 日本人には いかにも 玄米が 最良食品なればとて、決して 其外の物を 一切 食つては ならぬと 言ふのではない。たとひ 東京に をればとて、時に 西洋料理も 可、亦 時に 支那料理も 可。されど 昨今の如く 何もかも 西洋文明の外形のみ 物質のみに 見とれ、食物の如きも 西洋料理に あやかり、動物性の肉を食はねば 營養不良で、直に 神經衰弱に なるかの如く 自身 きめ込める迷信に 惑うては ならぬ。

肉食は 寒國の食物で あるから、我國の如き 暖國には 餘り宜しく ない。しかも その肉を供ふる動物を殺すに當り、之を 悲しましめ、怒らしめたる その肉を食ふ時は、その肉質が 既に 悲哀や憤怒に 變性してることとて、その變性せる 汁液が、之を 食する者の血液に まじり込み、隨て その人の血は 濁り、いつとは なしに 或は 憂ひ、或

は 悲み、或は 怒りて、荒荒しい 猛猛しい獸性に 近より易く；之に反し、植物性の食物を採り；その直接に 日光より 照りつけられし 自然のカロリを 人の身に 攝取するやうに すれば；猪 ぐうた 報いの 病は 少く、かつ その肉食者の氣質は 温和に、又 その壽命は 肉食者よりも 永く 健に 保たれる。

暖國に 寒國の食物が ふさはぬ計りで なく、同じ東京に居てさへ 冬も夏も 食物を うまく食ひたくば；冬は 寒國の物を 食ひ、夏は 暖國の物を 食はねば ならぬ。たとへば 魚ならば 冬は 銚子岬を 堺として、其處より北の魚；即ち 仙臺沖や 北海道の魚を 食ひ；米ならば 越後米とか 米澤米とか 北國産の米の飯が うまい。その反對に 夏は、魚ならば 銚子以南の房州沖や 相州沿岸 或は 遠州灘や 伊勢灣のものも うまかるべく；米ならば 伊勢米とか 肥後米などが 又 格別に うまい。菓物にしても 野菜にしても 夏は 夏物、冬

は冬物と、その時と處とに應じて、自然の食物を選ばねばならぬ。勿論、萬の事は全く信仰に基くもので、この貴い玄米の滋養さへも、之を信ぜざる者には全くその効能がなくなる。いかなる眞理でも、いかなる事實でも、信仰によらねば悉く空に歸する。

玄米飯の炊き方
玄米飯の炊き方とて別に普通の白い粕飯を炊くのと異ならぬ。ただ米を洗ひたる後、夏ならば十二時間、冬ならば二十時間も水に浸しおき、そして心ほど水を多くして、少し時を永く炊く位のもの；要するにネバリが吹きこぼれねばよい。それには二升炊きの釜に、二升の米を炊いたり；三升炊きの釜に、三升の米を入れてはならぬ。しそこねぬ方法はまづ三升炊きの釜に二升か二升五合の米を入れて炊くに過ぎる。故に三升の飯を炊くには四升炊の釜を用ふるのが上策。そして釜と蓋との間に眞田紐か白木綿

を幾重にも折重ねて挿むかして；釜と蓋とをネジ鉤か何かで締めつける。そして前以てその蓋の眞中に拇指位の穴をあけ；その穴へ二尺か三尺の管を氣突として、吹きたぎる湯氣を抜けば；ネバリもこぼれず、ふつくりとうまい飯ができる。爰に予の工夫した蓋の代りに名古屋市中區上津前町の長谷川商店に専賣特許の釜蓋があるので、至極重寶である。

飯の中でコゲほご口にうまく、しかも滋養分の多い所がないから；必ず狐色のコゲを造りて、その家の最もよく働く者に與へねばならぬ。そしてそのコゲを最もうまく味ふ爲には、釜の底に湯氣が廻つて、汗をかくようになるのを待つて；後飯をうつさねばならぬ。釜底からするすると離れぬコゲは固くて硬くて噛めもせず；味をもたのしめない。

全體飯は玄米でも粕米でも、ふつくりとできた硬いのがうまいので、柔いぐちやぐちやほ

ど ますい; 特に 粥とかスープとかミルクとか 柔い物ほど 水氣の多い物ほど 不消化で、腸胃に わるいから; 食物は なるべく 乾いた物を 歯で 噛むで、唾で ねるように せねば ならぬ。唾には 殺菌劑も あれば チヤスターゼも ある。そして 唾液の 出る分量に應じて、胃液や膽汁も それに比例して 出る。物の味を知るには 物を 丁寧に噛まねば ならぬ。殊更 玄米飯の味を知るには よく 噛まねば ならぬ; 噛めば 噛むほど 味が できる。玄米の飯を噛めば 噛むほど、その噛み居る間 殆ど お菜が いらぬ位に うまい。そして お菜で だましこむ 粕飯のやうに 食ひすとす憂は 少も ない。

食物は凡て 皮まじくら 凡て 食物は 皮ぐるみ。太陽の光と熱から成る味の素は 必ず その皮の裏に ひそむで をる。故に 林檎や柿の如き物でも 皮の すぐ裏の肉一分は 真中の肉の三倍も 養分が 多くて、味

が よい。特に 米の如きは その真中の 白い澱粉よりも その廻りの 黒い糠が 遙に貴い。勿論 糠ばかりでは いかにも 味が よくても、その香が 鼻に つき; 亦 いかにも 滋養分が 豊でも、その儘では 餘り多く過ぎるゆゑ、白米と云ふ澱粉を以て 味が 淡く調和されてる。然るに 虚榮に酔へる人が 自然の理法に叛いて; 大切な糠を除き、残りの調和劑の澱粉のみを 白米として 炊くから; 最早 その白米飯には 殆ど 滋養分が ない。故に その なくなつた 滋養分を補ふ爲に 牛肉とか 魚鳥とかで 補ふつもりだが; 人の智慧や力では とても その調和を 適度に保たれぬ。それゆゑ 白米飯に 牛豚鳥魚の肉を 副食物として、その脂肪や蛋白質の 多い割合に 身體の健康を 助けるどころか、反て 病を醸すようになる。近頃、金持病といふ 胃癌とか 糖尿とか いふ 面倒な病氣は 日本人の主食たるべき 玄米飯を 白い粕飯とし; その粕だけで 足らぬ分を 肉や魚で 調子

外れに 補ふからの 食過しに 外ならぬ。つまり 人の病氣は 凡て 食慾と色慾との過度より 生ずる。即ち 天然自然の調和を 破るから 起るので; 病は 疑もなく 罪の結ぶ果; 人には 耻づべきもの、神には 申譯の ないもの。

素より 食物の皮その物は 或は 滋養分が ないかも知れぬ。たとひ あるにしても 消化せぬから、先づ 滋養分が ないものと 見ても; さて その皮が 又 胃や腸の中で 大した働きを する。皮があれば 餘計に噛まねば ならぬから、噛む; 噛めば 噛むほど 齒が ますます 強くなり; そして 多量に唾を出すの益が ある。そして その皮が 胃に入りては 胃の中の物を ませかやして、消化を 助け、合せて 胃壁を 摩り強め; 腸に入りては、既に 胃の中で 十分に こねまはした食物を ぐるぐる ませくりて、満邊に 腸壁に接せしめ、その素通りを 防ぎ、悉く 滋養分の攝取に 便ならしめ、同じく 又 到る處に 抵抗療法を施し

て、腸の健全を 進めしめる。故に 食物は なるべく 皮ぐるみに 食ふのが 衛生上にも 經濟上にも 甚だ 益が 多い。

食物の合 まづ 平生の食物の割合を いへば、飯 七分に、お菜(副食物) 三分; その副食物は 植物性(菜野など) 七分に 動物性(貝魚鳥獸の肉) 三分とし; 又 その副食物の味附なども 鹽 七分に 醤油(不消化ゆゑ) 三分とし; そして 食事の際、飯でも お菜でも 一杯の盛切りと すれば、給仕人の うるさい手間も はぶけ; 又 靜に しかも 分量を 定めて、食ひ過ごさずに、緩緩と 腹 八分の食膳を 家庭の一大快樂と するのに 最も よい。

需用供給 我國の米の産額を 一年に 六千五百萬石と すれば、六千萬の人口に割當て、一人前 一年一石あまり。即ち 一人前 一日に 平均三合にあたる。此外に 麥も ある、豆も ある。現在

の國民六千萬が 食ふ食物、衣る衣服、使ふ材料には、現在の産額で 食物でも 材木でも 薪炭でも 染料でも、少も 不足すべき筈がない。それに 六千五百萬石の 米の中から 最も有害な 毒藥の酒に 五百萬石を つぶし；又 玄米の中の 最も大切な糠を 棄てて、白米とする 搗き減りの一割が 六百萬石；残りの白米 即ち 粕同様の白米といふ 澱粉が 五千五百萬石足らず；しかも この粕の 五千五百萬石も 運ぶ時、磨ぐ時、盛る時、食ふ時、食ひ残す時、食ひ過す時、此等の亂費が まづ 五割。そこで 六千五百萬石の中 實際に 同胞六千萬の健全な血となり、肉となれる米は 果して 三千萬石に當るかが 疑はしい。これ ひとり 米ばかりでない；豆でも、麥でも、菓物でも、野菜でも、材木でも、薪炭でも、海草でも、魚類でも、山や畑や田や川や海より生ずる 實際の産額の半分をも 正に實用に供して をらぬ。残りの半分を 無用に 棄てて居る計りで ない；五億圓の酒で 國民を 毒

の大洪水に 溺れしめ；二億圓の烟草で 國家を 毒の大火焰に こげただれしめ；其他の萬事萬物 亂用と悪用；人の 恩知らず、いかで 神の刑罰なくして 終るべき。地は 瘦せ、山は 禿げ、海嘯と地震、乾燥と水害、飢饉と疫病、嫉妬と戦争、皆 これ 我等の不心得より おこる。慎まねば ならぬ、おそれねば ならぬ。

人口三億でも六億でも わが國民が 神の恩寵に 感謝の念を抱き、一滴の水 一粒の米をも 有りがたがりて 頂くやうに なれば；たとひ 今の六千萬が 五倍の三億の人口に達しても、少も 生活難の苦痛は あられぬ。しかも 又 今の凡ての生産額を 十倍に増すのが 難くない。まづ 蜻蛉や蛙や小鳥などを 保護して、害虫を防ぐと同時に；植林の道を講じ、養魚の法を巡らし、風水の天災を除け、薪炭水燈の亂用と悪用とを慎み、家屋や器物の火難や腐蝕を避け；其上 凡ての産額を 今よりも 十倍に 増し；衣食

を十分に、禮節を全うせしむれば五倍せる三億の人口はおろか、十倍して六億の人口を養ふことも敢て難いことではない。ただ人が神に歸りて、眞に此島を恵まれたる瑞穂の國とし、全く天の孫となり、地の子となれば、即ち罪の無い大平民となれば、此島の外に一の領地を求めずとも、國家安康 平和な人生を受け楽しむことができる。生活難などはあくせく さわぐ 惡社會の惡夢にすぎぬ。

一の蔓にも
南瓜三十餘 人 或は今日の日本の産額を ござうして十倍にも増せるかと危むかも知れぬ。が人さへ正直に勉めて 體育智育徳育を高むれば、今の十倍どころか 三十倍 六十倍 或は百倍も難くはない。一例を挙げれば、予の若い友人に 牧師で、教師で、眞の意味の農夫がある。古來 南瓜は あた花が多くて、一株の蔓に 僅に三か四の南瓜が なれば よいとして あつた。と

ころが この友は 南瓜の蔓の 五六尺に延び、今にも 花を もたうと する頃を はかり; その蔓の根の土際の茶灰色の處と 青い緑色の堺目に 二三度 釘を通して、傷をつけ; 汁液はこの傷をつくらふに 忙しく、爲に 蔓の伸長を 一時 妨げられ; 幾日かして、その傷の いえし後; 汁液 漸く 蔓の先に 赴かうと する頃; しかも 將に 花を もちかける。その花に 力充てる汁液の 注がるることとて、どの花も どの花も 悉く 萎ます腐らず、一株に 二十幾個 三十幾個と 前代未聞の 南瓜を 多く 結ぶようになる。縮みて 伸び、苦みて 楽しむの人生にも 似て; 自然界は 益 榮えるもの、一人 改まりて 一家 改まり、一家 改まりて 一國 改まり、一國 改まりて 萬國 改まり、萬國 改まりて 地球 改まり、地球 改まりて 天體 改まる。天には 神に 榮光、地には 人に 平和 我等 その時を 妨げては ならぬ。

附けたり 南瓜の蔓の根元に 傷を付けて、果を 多く
結ばしめる如く；人生にも 苦が なければ 樂が
ない。 ひもじさを覺えないで うまい物を 食はう
と 思ふのが 間違ひ。 冬の霜に さされ、雪に
うづめられねば 春の芽も 出ず、花も さかぬ。
女の化粧の如きも、白粉を 塗るやら、紅を さす
やら；金を かければ かけるほど、顔の色つやも
おち、皺の折目も いとど 深く なる。 予の家に
出入りする女學生などに 教ふる 最高最低最古最新
の美顔術は かの白髪童顔の仙術を應用せるもので、
別に 瀧壺や谷川へ往く必要は ないが；ただ 寒中
でも 湯を用ひず、井や水道の水 その儘で 顔を洗
ひさへすれば 自然と 白粉や 紅以上の効能 著し
く 身の健康と顔の色艶とに 現れる、手輕な仕方
である。 人を だます化粧で なくて、心の美
を 形の美に 浮かばす 盛粧。

だらけ男の襟卷の如きも 最も不衛生、不經濟、不
格好の極で ある。 衛生上には 漫に 頸を包む

で 外氣の刺戟を避ぐるため、皮膚は 次第に 弱
くなり；甚しく 氣管を損する。 經濟上には 用
も無い物に 乏しい織物を費し；此を 襦袢とか 何
か 必要な衣物に せずして、全國 到る處に 幾百
萬の大金を 捨てて せる。 藝術上には 狸の晝寢
か むく犬の襠褌あさりの如く、男ども あらふ者
が、不活潑にも 程が ある；頸から耳から口から鼻
まで一襟卷に 埋まつて、しかも 懐手で のそつけ
る さま、正に 病人の出來そこね。

又 近頃のマスク！ 虚に吠ゆる一犬に 萬犬の應
ずる 馬鹿ばやし。 智慮なく自信なき 弱き憐な人
人。 それも 特別な毒ガスとか 何とか 人が こ
とさらに 爲しし わるさの外は；決して わざわ
ざ 人の造つたマスクなどを かける必要は ない。
神は 人の鼻に 毛を植ゑ、ミューカスで 濕し お
き；ごんな微菌でも埃でも 防ぐように して；人の
呼吸を 助けて えられる。 それに マスクなど
かけて、自分の 吐いた 臭い氣息を 吸ひ戻して；

かの死ぬる微菌よりも わるいガスを 吸うて、身を 害する。全體 空中の微菌などは 人の鼻氣息で 殺される。それに びくびくと 神経を病める 自製の病氣には 施すべき術も、飲ますべき薬もない。けだし 鼻で すべき氣息を 口で するのが 病の元。咳の如きも 口で 氣息を 吸ふから 起るので、鼻から呼吸すれば、大抵の咳は 直に 止む。呼吸は 鼻で すべきもの、口で すべからざるものと 深く 喰ひしめて おくが よい。

男女を問はず 脇臭は その當人も 隣人も 實に 迷惑 此上ない。故に 入浴後、硝酸銀水を 二十倍の水に 割りたるを、毛筆にて 脇の下に つけるが よい。衣服や手足に つけば、黒い痕を のこして、中中 どれぬから、何物にも つかぬよう、氣を 附けねば ならぬ。又 體質により、痒くて たまらぬ人も ある。次の入浴 或は 四五日の後、黒い色 はげ、尙 臭くば 二度も三度も つけるが よい；たどひ 全く 直らずとも、社交に 少も 妨

が なく なる。

此外、指の病氣には 泥鰌を割いて、その臟腑の方で 指を捲き包むが よく；胃痙攣には 家の入口などの 踏附けた 堅い土の上で おろした 大根オロシを 腹の痛い處に はるが よく；赤痢には 雲雀か鶉の黒焼を 飲むが よく；癰など 命取りの腫物には 干鮓を 摺鉢で 摺り粉にし、姫糊と ねり合せた膏薬を 貼附けるが よく；全體 皮膚病や癩病筋の者は なるべく 鮓を食ふが よく；肺病の者は 天麩羅や胡麻など 油物を 多く食ふが よく；又 齒を磨くには 鹽に優る磨粉は なく；齒を磨くブラシュの毛は なるべく 硬いのが よい。血膜炎などの 眼病には 唾で 解かした鹽を つけて のち、冷水で 洗ふが よく；風邪を よけ、咳を 止むるには 重炭酸曹達を 茶匙 一サジ カップ一杯の水に とかして、喉を うがふが よい。

凡そ 人は 神にさへ 叛かねば 病には かからぬ。自然の法則にさへ 従ひ居れば 身體を 健に

養はれる。酒を飲むたり、煙草を吹かしたり、茶を啜つたり、悪い牛乳を飲むたりせず；至極單純な清水をのみ；粕の飯を廢して、玄米の飯を食ひ；牛や豚や鳥や魚をなるべく少くして、ホーレン草などの胡麻アへや、種種の野菜を鹽で醃く煮たり、油であげたりした物や、漬物でも何でも日本古來の食物を今一層自然の最も自然な皮ぐるみに調へて食へば；決して容易く病に罹る憂はない。

神は一羽の雀さへ護り養ふ。昔から食ひ過ごし飲み過ごして死にし人は數限りもないが；まだ一人として正しい人が飢ゑて死にしまっためしはない。俄に病むのも早く死ぬのも各自の自業自得；悲まざるを得ぬ；慎まねばならぬ。

第四講 國字問題

信仰人の身體は‘地の塵’といはるる諸の原素より成立てるも、その身體の中の‘生命’といはるる魂は決して其等の物質より生じたるものでない。生命は全く物質以上のもので、神より出でたるものに違ひない。故に身體はパンで養はれても、魂は神の言で養はれねばならぬ。地に屬ける身體は地を離れられぬ通り；神より來れる魂は神を慕ひ、神と交り、神に歸らねばとても満足ができぬ。地に屬ける身體が地を離るれば死ぬる如く；神より來れる魂はその神に繋がる信仰の綱をたたるれば忽ちその神性を失うて、死に果てる。世の中に幾千萬の人が肉に活きながらも、靈に死ぬるのがここ。

ボギ車がどれほど奇麗に、堅固にできて居て

も、その手を電線まで のばして、發電處の電力に繋がらねば、動くものでない。人もその身體が いかにか 逞しからうが、美しからうが、いかに 藝に優れて 居らうが、智慧に富むで をらうが; もし 信仰の綱で 神に繋がつて をらねば、人たる人の徳 高からず、智 深からず; などひ 善なりと 言うても、美なりと 言うても; それは 單に 動物として 偶然の善か、無道德の美に すぎぬ。眞に 善を知つての 善に あらず; 美を辨へての 美でもない。人は 眞に 己の無智を知つて、初めて 智の一端を 窺はれ; 己の罪を悟つて、初めて 徳の薄ら影を かいま見ることが できる。その罪の深さを 認むる處に、聖き人生が 始まり; その弱き愚さを 悟る處に、強き賢き生活が 初めて 營まれる。

ある貴族が 傲慢な年を 送るのも; ある富豪が 貪慾な月を 重ねるのも; ある政治家が 壓制な日を 貪るのも; ある僧侶が 俗惡な時を 慕へるの

も; ある學者が 徒に 世に阿るのも; ある軍人が 漫に 劍を弄びて、國を亡ぼすのも; ある農夫が 勞を厭うて、あたら たなつ物を くさらすのも; ある商人が 身に著かぬ金を貪つて、さぼるのも; 皆 これ 人たるべき人が 人で無しの人と なつたからの こと; 即ち 神の家督を棄てて、惡魔の養子となりはてたからの こと。國と國との戦争も、政黨の惡辣手段も、資本家の暴利も、労働者のサボタージュも; 彼と云ひ 此と云ひ、滔滔たる俗世の惡世相。つまるところ '神を畏るるは 智慧の初' と いふ 信仰の智慧が ないからの こと; 即ち 世界の大勢に逆へる 毒惡非道の 危険きはまる舊思想が 生氣 潑瀾たる新生命を 塵にしたがるからの こと。

さて 此際 わが國民を助け、わが國家を救ふには、いかが 致すべきかと いはば; ただ 明なる正しき智慧を 低い下層の愚民ども いはるる者にまで 普く 授ける外に 一も 別な道はない。けだし わが國をば 千五百年前から 支那の文明が

照らして くれ; 千三百年前から 印度の文明まで
 が 助けて くれ; 三百年前から, 特に 六十年前か
 ら 西洋の文明が 導いて くれたので; 今日の我國
 は いふ迄も なく, 昔時の野蠻國では ない. そ
 して 遠からず 一廉の文明國に なることと 信
 じて, 予は 待望むで せる.

漢 字 支那の文明は むつかしい文字で 傳へられ
 た. その文字が むつかしいので, よほど 頭の良
 い者で なければ, 中中 覚えられぬ. それに そ
 の數が 多すぎるから, 忙しい働き人には 手に餘
 る. 故に 漢學は 貴人や豪族の慰みか, 學者や僧
 侶の道樂に 終る. そして 悲いかな, 千五百年も
 前から 孔子の儒教や 老子の道學などが 既に わ
 が國に 傳へられてるのに; それが 極めて 少數の
 者に 知られて 居るばかりで; 大多數の國民には
 あつても 寶の持腐れ, 又は その あるのさへ 知
 らぬ始末. とは 古來 我國には 國民の歴史 な

く, ただ ある豪族等の政權爭奪記あるのみ; その爭
 奪記も, 強い者 勝ちし者が, 國民の 知らざる お
 手前の漢字で, しかも 得手勝手な記録を 自慢顔に
 編み成し; 死ねる後までも 己が虚名を 恣にせむと
 て, ことさらに 遣せるもの; 人を思うてに あら
 ず, 民を憐むでに あらず, 文化の利器たるべき 性
 質を變へてまでも, 己が利益を獨占せむと する, 便
 利 この上 なき 暗號用に 亂用したるのみ. 之
 が 我國に於ける 今日までの 漢學漢語漢字の祕密
 主義で ある, 獨占主義で ある.

かく 少數の者が 我儘を極め, 最も祕密に 何か
 を 書き送り, 又 書き遣すのに, それ 或は 漢字
 が よいかも 知れぬ. しかし 人を益し, 國を利
 するには 不便 極まる符牒で ある. 漢字の代り
 に も少し やさしい文字で 支那の文明が 千五百
 年前から 我國に 弘められたならば; とくの昔か
 ら 孔孟の社會學でも, 老莊などの哲學でも, 難解の
 易經でも, 小面倒な禮記でも 深く學ばれたり, 弘く

行はれたりして; 予の如き 和漢の學に 素養 乏し
き者までも、あるひは その恩澤を 蒙られたかも
知れぬ。

印度の 支那の社會學や經濟學に 二百年 後れて、
文明も 我國に もたらされた 印度文明の如きも、あの深遠
な哲理。あれで その支那文明の 及ばぬところ、
足らぬ分を 補ひくれた その佛教。これさへ、又
支那譯の漢文; 相變らず 準形象文字、虚飾符號で
輸入されたる みじめさ。とつて以て 國民の生命
と すべき 其等の兩文明が 悉く 貴族や僧侶の壓
制を 助け、國民の大部分を 無智無能に 終らしむ
る 凶器に 轉せしめた。その凶器が 永い間 國
民の智慧の芽と いはず、枝と いはず、根と いは
ず、切り刻み; 二十世紀の今も 尙 我が 憐むべ
き 九百萬か千萬の學生を なぶり殺しに さいなむ
で をる。

文字としては 形象文字に次ぐ 劣等な漢字の代り

に、若も 數百年來 何か 優秀な文字が 用ひられ
たならば; 今よりは 數百倍も わが國民の生命は
清く太く、その思想は 高く正しく、その言語は 強
く 鮮に なつてたに 違ひない。然るに 十五世
紀の間も この劣等文字の爲に、わが言語が 押へ付
けられ、思想が 閉ぢ込められ、生命が 半殺しに
されてる。勿論 予は わが先祖達の 蒙りたる
支那文明、しかも その支那文字の恩惠をも 拒み
は せぬ。しかし 我國の幼い時に、食ひし食物、
衣し衣服、住みし古家を 今も 尙 その儘に 用ひ
つづけたくは ない。千五百年の間に 成長した
わが國民の生命に應じた 食物と衣服と家屋とを そ
れ相應に 造り代へたい ばかり。千五百年前
には 凡ての凡てで あつた 漢字も 今は 最早 骨
董品として その價を貴ぶに とどめ; その 日に日
に 古びかへる 支那物で、この 日に日に 又 日
に 新に改まり往く 國民の生命を 殺すに 忍びぬ。

覚える難 幾萬といふ漢字を一一覚えるのが容易でない。一字千金などいふことは昔の唐人の寢言で、文字其物には眞の價のあるものでない。その文字がある意義をあらはす符牒であるから貴いので、それが符牒たる以上、なるべく覚え易く、見やすく、便利なほど貴い。それに一字千金などいうて、恰も文字といふ符牒その物に價あるかの如く言ひ觸らして、徒に學者ぶり、貴族がりて來たのは、醉興も醉興、ミイラ取りがミイラに成つたのと同じ憐れさ。故にただ漢學をば専門の學課とし、漢字を一種の遊興に學ぶは大に可；されど此をしも諸學校に於て、普く教へ、幾多の兒童を苦め；しかも勞して更に効の無い、徒な勞苦を強ふるに至つては言語同斷、沙汰の限りである。

予は支那文明その物を嫌ふのではない。千五百年の間、我國を教化してくれた支那文明を、殘らずわが國民に覚え居らしめたいから、漢

字を排斥する。今のままで我國に幾萬の漢籍があらうが、いかに深遠な哲學を藏めてあらうか、それは少も國民全體の味ひ得らるるものでない。僅な漢學者とか貴族等が何れもぶつたりらしがつたりする獨占の利器にすぎぬ。國民の大部分は寶の持腐りどころか、その寶のあることすら知らずにをる。もしも儒道とか、老子教とか、陽明派とか、あれほど深遠な人道や天理を今少し讀み易い文字で國民一般に傳へ呉れたならば、予を初として、幾千萬の同胞が今幾層の高き清き品性を養はれたであらうか。たとひ乞食文でも、飲だくれ詩でも、韓退之とか蘇東坡とかの文章がどれほど我等の文筆を雄大に輕妙に馳せ躍らしめたか知れぬ。畢竟予の如き、田は朝飯前に作れても、詩歌は夜なべ兼ねても作れない；支那の思想も吞込めない；支那の文章もこなせない。これ果して何が故かといはば、單に漢字の覺えにくい爲であ

る。漢字を廢して、此を見易い文字に書き直して、國民一般に讀まししならば、徳川時代の儒者先生を待たずして；國民を擧げて道念高き品性を備べられたに違ひない。惜いかな漢字ありし爲に、漢學はさびれ、支那文明は衰へ、わが國民は無智文盲に陥つた。予の漢字排斥は支那思想の侮るべからざるを思ひ、支那文學をも盛ならしめむがため；漢字亡國論を唱へて止まぬのである。つまるところ凡ゆる漢書を國譯にして、何人にも讀ましめむがため；そして漢文の研究、漢字の筆法は之を専門の漢學者や書家の嗜好に任せおき；一般多勢の國民はその符牒たる漢字よりも寧ろ實質たる思想や意義を手取り早く學び取らねばならぬとのこと；十八史とか春秋とかを見て、支那の興亡を察し；詩經とか易經とかを讀みて、天地の運行を窺ふなど、支那文學を思ふの益切なるほどに、彌漢字廢止を急がねばならぬ。

憐な幼き小學校の小供より盛な大學校の大供にいたるまで、この智識發達の大障害物たる漢字のため、最も大切な生命と、貴い歲月とを何程空しく過ごしてゐるかといはば；まづ七歳に始まる小學校より、二十五歳に終る大學校までを十八九年と見；その内の五年を全く漢字を覺ゆる爲と此を書く無駄手間とに費すものと見て；一千萬の學生が、その學年中に凡て五千萬年をすて；さて學生外に三千万の働く人人が漢字を讀み書きする爲に、毎日一時間づつ餘計につぶすとすれば；一時間の價を平均五十錢と見て、一日に千五百萬圓即ち一年に五十四億七千五百萬圓を浪費してゐる。この莫大な金高は單に數に於ける經濟上の損毛で、此上の無形の精神的に蒙る損失はとても想像のできるものでない。

漢字は紛はしい 漢字は一旦覺えさへすれば至て解り易

く、繪の如く一目瞭然だと言ふが；決してさうでない。たとへば‘御前’は殿様に使ふ‘ゴゼン’か；或は奥方に使ふ‘オンマヘ’か；或は普通に子供や召使に使ふ‘オマヘ’か；或は神か何かの前の‘ミマヘ’か更にわからぬ。又‘後家’は後の家のことか、或は夫を失つた寡婦のことかもわからぬ。‘質’の字も性質の質か、問ひ糾すことか、金を借る爲に入れたカタのことか；これも亦わからぬ。又見別けも附かぬほど似寄れる文字に‘己’は‘コ’でオノレ、‘巳’は‘イ’でステニ‘巳’は‘シ’で十二支中のミとは；さても覚えにくい。又アイヌ語の‘深い水’のワカサ、‘突出る端’の‘ソト’をその儘にしておけば、その名と共にその意義までが傳はつたものを；むつかしい漢字で‘若狭’とか‘能登’とか書いて、何の事だか反てわからなくなつた。此間も九州の旅行に面喰つたのは、‘鳥栖’を‘トス’、‘大畑’を‘オコバ’、‘日出’を

‘ヒヂ’、‘南風崎’を‘ハエノサキ’などを初めとして、數かぎりもないが；驚く勿れ日本國中汽車旅行に停車場の名を正當に漢字通りに讀むで、それこそ當つたら、上の又上の八卦；まづ當らぬのが當りまへ。人の名にしても何にしても、‘服部’の‘ハツトリ’、‘春日’の‘カスガ’などは、見慣れ聞き慣れてるから不思議とも思はぬが；さて何處を押して此等の漢字からそんな音がでるだらう。況て次の讀方などは重箱讀とも、百姓讀とも、讀めた讀方でない：—

一口	イモアラヒ	一青	ヒトト
一二三	イジミ、ヒホミ、ウタタネ		
一名代	テンナシ	一宮善	イダゼ
一寸八分	カマツカ	二十五里	ツユヒヂ
二十六木	トトロキ	三斗九升	シトツテ
四十四院	ツルシ	四月一日	ワタヌキ
五月	サツキ	五十幡	イカハタ
五百藏	イホロイ	六九洋	スハウナダ

六月一日	ウリハリ	七五三	シメカケ
七寸五分	クツワタ	八道	ムサシ
八月一日	ホヅミ	九石	サラシ
十	モモキ	十二月田	シハスダ
十二月晦日	ヒヅメ	十六合	イザアヒ
十七夜月	カナウ	十八女	ワカイロ
言語同斷	テクラ	釋迦牟尼佛	ニクルベ

又 言はずして 解つてるやうな、思はずして 悟つてるやうな、かの藤原氏に 因みてか、或は 伊藤氏に ゆかりてか、それとも 藤の花に、ほたへてか；同じ藤の字の 附いてる 姓の中に；まづ 安藤、赤藤、青藤、尾藤、江藤、衛藤、遠藤、兵藤、玄藤、後藤、伊藤、加藤、兼藤、近藤、黒藤、工藤、清藤、武藤、元藤、内藤、仲藤、新藤、齋藤、佐藤、末藤、白藤、進藤、須藤、苜藤、恒藤など はてしも ないが；さて その齋藤の漢字を廢して 單に‘サイトー’と言ふ通り、假名で 書いたら；忽ち その姓の持主に 藤の花の美や 藤原氏の榮華の夢を 失はしめ

るで あらうか。漢字のを 假名のと 同じく‘イトー’或は‘サイトー’と言ふたどて、決してその當人の品性や名譽を 毀損するもので ない。反て 日本語の意義を 暗まし、祖先の記憶を 薄らげ、活動の元氣を そいだのは 慥に 難しい符牒の漢字である。

素より 漢字とても ある書家に かなぐられて、‘書道’といふ 一の美術品に 成り濟ませば 至極 結構；書家をして、益 その書法を 研かせるが よい。偶には 世の 忙しい人人も その書法を學びて、時に 揮毫を試むるも 罪が ない；しかし 漢字を 一般の活社會から 逐出せばどて；決して この高尚な 無邪氣な 藝術が、全く 無くなる憂は ない。別て 漢字の外にも 世界の凡ゆる文字が 皆 美術的に、頗る その筆勢 紙面に 躍り出る生氣を 有つてるものである。假名と いはず、ロマ字と いはず、グreek文字と いはず、ヒブリ文字でも アラビヤ文字でも 各自 その潑刺た

る生氣、清爽たる氣品を備へてをる。それかどでわざわざ書家としての漢字を廢するにも及ばぬが；又廢したどて少も差支がない。此に代る文字は幾らもある。

要するに同胞六千萬の生命と時と金とを滅殺する漢字の常用を廢して、國民の生氣を盛にし、思想を深くし、言語を強くし、読み書を樂にしたいのが、予の立ての望に外ならぬ。

假名文字 平面に龜の子(𪛗)の繪を書くよりも、龜の字の方が遙にその劃も多くて、記憶にも難しいので、他は推して知るべしとして；世には漢字廢止や字數減少に賛成する者も少くない。そしてその人人の中には、寧ろわが國の假名文字を以てすれば、凡て外國の文字を借らずとも、何等の差支がないと言うてる者もある。が假名その物は決して藝術の方から見ても、餘程美の點に於て缺けてる。その美の點

からいへば、聊か漢字にも劣つてるかど思はれる。ただ漢字と同じのはその眼球の運びに逆うて、最も不衛生的に最も不經濟的に縦讀みに讀み下さねばならぬところだけ。勿論その曲線の視覺を傷けざるは聊か漢字の角張りて眼を損ふには優れるをも認めらるれど；元來漢字と梵字とできあつたチャムボンの合の子どて；見る目にも、書く手にも、之はどほめた符牒でない。特にそれが千三百年も前に用ひられたるわが國語を當時のままに映し出したる音符文字どて、今日の言葉に適せざるものもある。たどへばハとワ、ヘとエとエ、ヒとイと井、フとウの區別を失ひたる；又今のハの如き、最早唇音に非ざるものに二の點を附けてBの音、丸を附けてPの音を出さしめたりするところを見れば；千三百年前のハは今とは異なり、儘に唇音のFであつたものと察せられる。今の如く唇音に非ざるハに點を幾個つけようが、丸を

つけようか; とても BやPの音の 出るもので ない。もし 今の假名を用ひて、BやPの唇音を 出さうと ならば; 是非とも マの字に 點や丸を つけねば ならぬ。

この外に、千三百年前の調子で、漢音や吳音を 現さうと するので; 等しく 'ショー' と いふには、'セウ、セフ、シヤウ、シヤフ、シヨウ、シヨフ' とか; 或は 'チャー' と いふには; 'テウ、テフ、チャウ、チャフ、チヨウ、チヨフ' とか; 又 'ギョー' と いふには; 'ゲウ、ゲフ、ギヤウ、ギヤフ、ギヨウ、ギヨフ' など; 何れが 果して 千三百年前の正確な漢字の發音で あつたか、わかりも せぬのを、今正確に 發音するのも 難しければ; 亦 たどひ 此を 正確に 發音したりとて、どうせ 北京の滿洲人や 南京の支那人とて 少も 喜びさうに ない。ただ 日本人が 自身 物ずきに 苦むまでの こと; 特に 小中學校の子供等を 虐待するに ござまる。實に ばかげた話; いや 無慈悲な極み。

赤坊の時の搖籃が 青年の時の自轉車にも、壯年の時の自動車にも ならねば; それかとて 老年の時の棺桶にも ならぬ。それと同じく、千三百年前に生きてゐた わが國語の搖籃を勤めた 假名文字の中には、わづか 三百年前の徳川時代の言葉の棺桶とさへ 成り果てたのも あつた。その棺桶同様の假名を、今日 せつせと 動き、めきめきと 成長してゐる わが國語の自動車に しようなどは、實 以て 氣の知れぬ やり方と いはねば ならぬ。

わが國民の生命を 大く し、思想を 聖く し、言語を 強く し、諸の改造を 企つるには、漢字も假名も 決して その適當な仲介で ない。何か 最も 便利な符號を以て 漢字や假名に 代へねば ならぬ。そして 凡ゆる漢籍を その適當な符號の文字に 翻刻せねば ならぬ如く; 凡ゆる國學の書類をも、亦 悉く その同じ 適當な文字に 翻刻して、古來の わが文學を 六千萬の同胞に 學ばしめねば ならぬ。古事記は 愚か、萬葉とか 古今と

かの歌集; さては 竹取に土佐日記, 源平盛衰や何百の物語, 兼行の徒然や, 門左の淨瑠璃をも, 予の如き和漢の文學といふ文學を知らぬ者にも讀まれるようにしてほしい。漢籍 佛書 國典など幾百萬卷の寶物を 持腐れに せざるよう, 其等の内容を 残らず 國民全體に 頒けて 樂ませたい。漢字は 支那文學の傳播を 妨げ; 假名は 邦語や和文の進歩を 害する。遠く大に慮らねば ならぬ。

ロマ字 さて 従來の漢字も假名も 好ましからぬ符牒と すれば; 果して 何を選ぶべきか。數の 少きを 貴べば, ヒブリ文字の 二十二に 若くは なければ; その缺點 亦 少くは ない。書いて 美しい點を いはば, アラビヤ文字の 手に 書き易く, 目に 麗しきに 優れるは なければ; その數の 多きは わが假名にも 似てるから, 取つて 用ふるのも 考へ物。そこで 今は 既に 廣く 世界の文字として 用ひられ居る, しかも グリク文

字を 練りに練りたる 精製飛切り, 殆ど 完全無缺とも いふべき, その曲線は 目を やはらげ; かつ 僅に 二十六文字の中にも, 首の のびたる あり, 尾の 長き あり, 幅の 廣き あり, 身の 小き あり; 綴りて 繪の如く, 書いて 躓くこと なき ロマ字こそ わが國字として, 最も適當な 最良 最便の符牒と 信せざるを えない。

學び易く
書き易い ロマ字の數は たつた 二十六。覺えるの に 頗る易い。子供にでも 二週間 或は 三週間 教ふれば; 讀み書きが 自由自在に なる。松山市の一友が その子に 1教へたるに; たつた 二週間で 自由に 讀み書きが できるやうに なつたこのことを見ても わかる。小學校に 六年も 學びて, 尙 讀み書きの できざると 雲泥の差である。六年! 二週間! ロマ字は 書くにしても, 運筆が 自由で; しかも 眼の球と 同じく, 手を 横に 走らす上に, 文字の撥ね先が 漢字や假名と

は異なりて、その撥口がすぐ次の文字に繋が
るので、筆の勢を殺すこともない。

印刷の
手間の
現在の我國の印刷は 廣い世界に 又と 類
のない、最も面倒な仕方。漢字と假名と 入り
亂れて、送り假名に 振り假名; 何たる 珍妙ぞ。
ロマ字ならば 一人手間にて すむものを、今の印刷
にては 二十人の手間を かけて せる。新聞社の
仕事にしても、ある演説を 紙上に のぼすには、ま
づ それを 速記法にて 筆記し; 社の編輯局に 歸
りて、此を 翻譯し; その原稿を 文選とかの子供
は 走り巡りて、謠ひつ、うなりつ 拾ひ集める; 植
字方が 組む; 校正掛が 直す; 摺るやら 直すや
ら; 中中 容易で ない。然るに それが もし
ロマ字ならば 一記者が 編輯局の一隅に、電話器
を 耳に あて; 坐りながら、離れたる會堂の演説
を 聞き; 聞くがまま リノタイプを かなでる; そ
して 演説が すむと 植字も すむ; 聴衆が 門を

出ると、號外が 社を出る。まさか それほどには
早く 参らぬにしても、遅いのと 早いのと その割
合は 慥に 二十と 一!

學問の
普及
及 いかなる漢文でも 和文でも、亦 今の文學
でも 科學でも; 此等を 悉く ロマ字に 書き直せ
ば、誰でも 何時でも 讀めるから; まだまだ 學校
へも幼稚園へも 往かぬ 子供等でも、苦まずに 種
種の書物を 讀むことができる。何でも 讀みさ
へすれば 智慧が つく。學校へ往かずとも 相當
の智慧が つく; そして 地理でも 歴史でも 物理
でも 詩歌でも 一通りは 心得られる。のみなら
ず 學校へ入りても、慥に悟りが 早い; 其上に 七
面倒な漢字や假名の 使ひ分けが ないから; 小學で
も 中學でも 大學でも、今の三分一の時間で 大抵
の事は やつて のけられる。故に 徴兵適齡に
ならぬ前に、はや 大學校までの普通教育を終へて;
まだ 暇が ある。故に 二十歳までに 學校教育

を終へ；二十一歳の曉に一年位體操か遠足と心得て、徴兵に出掛けたとて、少も學業の妨にならぬ。しかも徴兵猶豫の面倒さへなければ；無暗に文部省の御厄介にならずともよし；私立の學校が各自その特色を發揮して、眞に實利實學の學校となり；人材養成の目的を十分に自由に達することができる。

知識の達 至極便利なローマ字を用ひて、學問さへ普及すれば；何もかも明にわかる。昔時武士の生命と思ひ違へた二本の大小も、廢藩置縣に際し、泣きの涙で丸腰になり；その當座は危険とも不安とも、夢さへ穩でなかつたのが；その實丸腰にこそ初めて平和な愉快な月日の照るのを味ひしやうに；一日も早く斷然軍備を廢して、初めて國家の安康を全うせらるるをも實驗し；國に死刑を廢して、罪人の増さぬ事や、學校に退校處分を廢しても、決して不良少年の殖

えぬのをも辨へるやうになる。

昨今新舊思想の衝突よりして、最も穩健なる新思想が、反て危険極まる舊思想ににらまれて、其間にもつれもつれて、黒と白とを分けもせず；ごやごや、がやがや、それ労働問題、いや婦人問題、やれ禁酒、そら禁烟と、言ふまでもないわかり切つた事を、わからずに騒ぎ廻つてるとは氣の毒千萬。諸の難問の解決はただ正當な智識さへあれば足るものを。そしてその知識を普く男女老弱にも得しむる唯一の良法はローマ字の採用による。

ローマ字 外 羅馬字を用ふるのはわが國民の便利を計るにあるけれども；亦同時に外國の人人にもわが國語を親しく學ばしめ；且わが文明を廣く知らしめ、諸外國と互に知り合ひ、親み合ふ最も良い方法である。

米國の西海岸に於て排日熱の起るのは、様様の

事情が からみ居るに 違ひないが; その主なる一は 米國社會の美的趣味を 傷くる所の 漢字や假名を、在留の同胞が 筆太に 店の看板に さらし居る事や、漢字假名を以て 異様な新聞を 毎日 出版せらるる事などが、わが同胞の同化を あやぶましめ、疑心暗鬼を 生せしむる; 決して 輕少ではない、世界平和のため 悲まざるを得ぬ。

尙又 ハワイ諸島 其他に於て、毎年 生るる幾萬の わが子供等が 漢字や假名を嫌ふや; 見て 嘔吐を催すのみならず、爲に 母國の言語をも 歴史をも 學ぶを 耻ぢ 且 悶ゆるのは、全く その漢字假名文字の 不完全な 醜き點より 來るものであるから; もし ロマ字を以て 教ふるならば、その母國の 言葉をも歴史をも 學びて; 遙に 父母の故郷を 慕ふに 違ひない。在外幾十萬の わが子女をして 漢字假名文字の爲に、愛する父母の言語を 用ひしめず; 徒に '明治' とか '大正' とかの 年號を用ひ、世界共通の紀元年月を 用ひざるため、祖國の歴史

を 覺えず、爲に 愛國心の微塵をも 抱かしめざる とは、一には 彼等自身のため、二には その當國のため、三には その故國のため 誠に 歎かはしい 極みである。

衛生的 ロマ字は 曲線美を 備へをりて、漢字や假名の如くに、鋭く 目を刺さぬ。又 眼球の運行に伴うて、右や左と 横に走るを以て; 眼のボークスを 保ち易い。試に 汽車の中で 縦文字の邦語新聞と 横文字の英語新聞とを 讀み比べるが よい。東海道を走る 上等の汽車でも、その揺れる度に、邦語新聞の縦行は 一分も二分も 視線を外れて 逃げ出す; それを 追掛ける兩眼の衝突。之に反して、横讀みの英語新聞は、少少 汽車が 揺れても、兩眼に沿へる横線とて; 線中 一分や二分を 外れたりとて; 左の眼を外れても 右の眼が 捕へるので; 決して 視線を外れたり、ボークスを 失ふことはない。そして 眼の疲れ方が 大に 違ふ。

反對の數
 羅馬字の活用に 反對する者は 漢字や假名を わが國に於ける 固有の生命とも、思想とも、言語とも、思ひ込み、考へ損ね居るが；其等は 僅に 千二百年か 千五百年の 浅い短い 過去に こびりつける 偏見で；世界共通の羅馬字が 今後 幾億年の將來を もてるかを 知らぬからである。そして 漢字が 読み易いの、假名が 書き易いのだと言ふのも、つまり 自分等が 三十年か 五十年、つい 読みなれ、書きつけてるだけの こと；羅馬字とて 一二年も 読みつけ、書きなれば；從來の漢字以上 假名以上に 便利至極に なる。幼い子供に 教へて 二週間に 覚えられる羅馬字と、十年も かつて、覚えられぬ漢字や假名と 何れが 難いか 易いか、言はずとも わかる。

同音異語
 羅馬字では 同音異語の區別に こまると言ふが；それは 日本語を使はないで、馬鹿な漢語を使ふ 馬鹿者の馬鹿話に すぎぬ。羅馬字を用ふれ

ば、漢語が すたつて、日本語が 盛に なる。羅馬字は 日本語を活かす 唯一無二の文字である。紛はしい弱い漢語は 死に、強い明な日本語が 起きて くる、生れて くる。

たとへば 1. 喊聲, 2. 陷穽, 3. 閑靜, 4. 寒生, 5. 寒聲, 6. 監製, 7. 寒製, 8. 箝制, 9. 駢聲, 10. 感性などの 'カンセイ' を、餘計な できそこねた 漢音にも 吳音にも オクビにも 出さぬが よい。即ち、1. トキノコエ, 2. オトシアナ, 3. シヅケサ, 4. ワタシ, 5. サムゴエ, 6. ミハリ ツクル, 7. カンヅクリ, 8. サシトメ, 9. イビキ, 10. カンジ シヤウで 結構。

そんな面倒な 漢字や漢語に、日本語を亂されたればこそ；英語ならば 唯一の 'アイ' で すむところを；今の わが國語では まあ どうだらう；予の 知つてるだけでも 次の通り；まだ 此外に 幾ら あるか 知らぬ。

ワタクシ, 私, ワタシ, ワシ, ワモジ, ワラハ, 妾, ワタイ, アタイ, オトシ, オトイ, ハシタメ, シモメ,

シモベ、ヤツガレ、ワツチ、ワツチキ、オレ、乃公、
俺、オリ、オイ、オイラ、オラ、オドン、オイドン、
ワイ、ウラ、オノレ、己、ミヅカラ、自、親、ソレガ
シ、某、ウチ、コチ、コチド、ワレ、我、吾、ワ、ア、
ボク、僕、予、余、手前、身共、自分、鷹、朕、我輩、
吾輩、吾曹、我儕、コノハウ、此方、拙者、拙生、拙
子、拙弟、拙僧、下拙、愚拙、拙道、貧道、迂生、愚
生、愚鈍、暗愚、愚老、愚僧、愚衲、鈍生、豚生、野
生、貧生、寒生、陋生、弊生、劣生、老生、微生、生、
小生、子、小子、愚子、不肖、卑賤、弟、小弟、劣弟、
小官、本官、臣、微臣、小臣、賤臣、賤奴、

此外に 幾等も 數限りがあるまい。しかも
それが 自分ほどの者は 他に ないと、うぬぼれな
がら、こんな 虚偽の自稱を並べて、相手を 茶に
してる。が 此等の虚偽や、其他の虚禮も ロマ字
を用ふれば、忽ち なくなつて しまふ。

揮毫 今 一つ ロマ字は 揮毫の清興を 備へ居

らぬと 言ふかも 知れぬが; それが 又 漢字や假
名に 雅致の ある通り、ロマ字にも 十分 備はつ
て をる。 書く人の品性次第で、清興が 湧き出る
虹の 天空に かかるが如く、龍の 雲に 乗るが如
く、或は 躍り 或は 跳ね、しかも 幾何學上の軌
を外れずして、奔逸の 自由自在なる、或は 漢字以
上かも 知れぬ。 近い話が、近頃 店頭や 其處ら
に 晒されてる 間違ひだらけの ロマ字でも 英語
でも、漢字や假名の 間違ひだらけ 崩れがちのと
比べて、どうで あらう。 ロマ字が 美術の點よ
り 見て、敢て 漢字假名文字に 劣らぬ計りで な
い; 更に 社會學上より 見ても、ロマ字には 眞の
個性を保ち居る所より、自守自立に 社交的な調和
を 破らない。 之に反し、漢字假名文字は 自我
自主の傾き ありて; 社交上の調和を 保たざること、
恰も 日本の都市町村を問はず、道路の 秩序なく、
個個 列を亂りて、各自 勝手次第に 家家の 並び
をるのと さも よく似てる。 規律 なき、公德

なき、その國民の氣質の文字に現れ居ることは正にその家畜の相貌を見てその國民の如何を知り得るに等しい。

ローマ字の綴り方 今のローマ字はその親元のグreek音を傳へ居るものの；永い年月に、廣い世界を經巡れることとて；その國國の言語に應じて、多少異なる音を現すやうになつたのは、恰も米國産のメリケン粉が獨逸にいつてはブリツルとなり、佛國にいつては棒パンとなり、英國にいつてはケーキとなり、伊國にいつてはマカロニとなり、日本に來ては餛飩となるやうに；同じローマ字も其内の或るはある國である用ひ方をされてる。故に我國に於ても邦語に適するやうに、ローマ字を自由に用ひて、少も差支がない。同じローマ字を獨逸語や佛語や英語にはどうのこうのと無理に真似なくてもすむ。ドイツでもフツゴでないエー方を選べばよい。勿論エ

スペラント語が歐洲諸國の多數の共通語を選べる如く、我國に於てもローマ字を用ふるに當り、最も勢力ある英語風に倣ふべきも；素より不便を忍びてまでも、英語的にわざわざローマ字を變用するに及ばぬ。

新しい綴り方 そこで同じローマ字を用ふるにも、六十年來の英語式、或は‘ヘボン式’、三十年來の日本式、或は‘田丸式’といはるる綴り方を離れて；予はイ行に於ける七個の文字を、卷末にある別表の如くに利用してゐる。僅にこの七個の使ひ別けをすれば、從來の綴り方より三割或は三割五分の時と金とを省けるやうになる。即ちエムとアイとでミなのを；そのアイの代りにエムの腹に横線を引いて、ミとし；走り書きの時は、その横線の代りに、一結び結ぶことにする。そしてウ行に於てエムとユーとでムとせず；全くユーを省いてエム一字でムとする。

しかもこの綴り方が是迄の英語式よりも、日本式よりも、期せずして遙に世界的なので、全く日本語を知らぬ外國人にも、日本語をよほど正確に、或は正確に近く發音させられる。

三十餘年前ピラデルピヤの一學生が予に向ひ、シャイバ シャイロ君を知つてゐるか と問うた。ちと面を喰つたが、思へば柴四郎君の事である。なるほど Shiba Shiro ではどうしても シャイバ シャイロ としか音が出ぬ。しかし予の綴り方によると、たゞひ初めからその読み方を教へなくとも、同君の國なまりそつくり、何處の外國人でも發音する。Sba Sro だから、スバ スロ位は言へるから、會津辯の上乗なるもの；まして予の綴り方に於けるイ行の読み方を心得おけば、少も苦まずに間違へずに、シバ シロ と讀まれる。又‘しきりに’の如きも、Shikirini は シャイキライニ である；しかし予の Skfn ならば、教へなくとも スクルヌ位

の想像がつく；教ふれば‘シキリニ’と言ふに苦勞はない。

イミウ 言語學上の原理より見て、イ及びウの半母音たる點より、そのアイとユーとを書かず；アは父文字に貫く一線を以て代用され；ユーは父文字に含めおく。とかく文字は言葉の符牒にすぎぬ以上は、最も簡單明瞭を貴ぶもの；予の綴り方は至つて簡明である。故に予は多くの敬ふべき熱心なる諸處の國字改良家の新工風にかかる、新假名にも同意するをえず；どこまでも羅馬字の適用を主張し、傳播する。

予の立場 文字は言語を遠く運ぶため、永く後に遺すため、紙に寫して目に見せる符牒；言語は心に起る思想を口から耳に吹き込む音響、思想は刹那刹那に閃く生命の感興である。感興も明に纏まらねば思想と成らず；思想も爽に響かね

ば 言語と 成らず、言語も 美しく寫らねば 文字と 成らぬ。故に 文字が 善からねば 言語を悪くし；言語が 足らねば 思想を 貧くし；思想が 弱ければ 生命を殺すように 成る。かくて 單に 符牒に止まると 云はるる その文字の良否に由りて、しかも 國家の盛衰を 醸し、民衆の禍福を 招く；漢字亡國論を 唱ふるも、決して 過言で 無い、失語で 無い。

内村君言 日本語は ローマ字を以て 書かれざるべからず、若し 然らずば 日本語は 終に 死んで了うであらう。縱し 死なないにしても 日本の文明は それがために 阻害せられて 日本國其物の存在が 危く せらるるであらう。そうして、日本語が ローマ字を以て 書かれ得ない理由は 無いのである。歐洲に在りては ハンガリー語とフィンランド語とは 日本語と同じく アルタイ系の語であるにかかはらず 立派に ローマ字を以て 書かれ

て すべての文明的言語と思想とを 同化しつつ ある。日本語も 二者の例に倣ひ ローマ字を以て 立派に 文明的言語の中に 仲間入りすることが 出来る。左近義弼君は 獨創的にして 勇氣に 富み、茲に 日本國の興亡に 加かはる 此大問題の解決を 試みんと欲す。余は 君が 單獨の力を以て 能く此大事業を 完成し得やうとは思はない。然し乍ら 君の如きは 確かに 解決を試むるの資格を 有する 人である、而して 日本人、否な、世界人は 此事に關する君の意見を聞いて 大に利益せられざるを得ない。殊に注意すべきは 左近君の目的の 是に非ずして 彼に在る事である。君は ローマ字體の日本語を完成して、然る後に 君の終生の事業に就かんとするのである。君の志望や 遠大である。余は 神が 君の此試みを 祝福し給はんことを 祈る。

文字と言 世界共通の文字は ローマ字に かぎり、人類

共通の言語は エスペラント語に かざる。故に
凡そ この地球上に生息すべき人は 文字は ロマ
字、言語は 己が生れつきの國語と 世界的のエスベ
ラント語を 語れば よい。其他の國語や國文は
特別な事情と場合にのみ 用ふれば すむ。今より
二十年の中に ロマ字を以て 漢字假名文字に 代へ
ねば、我國は 亡び、十年の中に エスペラント語
を 語らぬ者は 世界に存ふる資格を うしなふ。

しめくり 日本國民として 生き存ふるには：第一。
耶蘇教に於て 教ふところの 神を信じて、耶蘇を
愛し敬はねば ならぬ。第二。ロマ字を學びて、智
慧を働かさねば ならぬ。第三。玄米飯を食うて、
體を養はねば ならぬ。第四。切禮を行うて、人種
の改造を企てねば ならぬ。第五。日曜日を 聖く
守りて、社會の幸福を増さねば ならぬ。第六。禁
酒禁烟を斷行して、衛生と經濟とを慮らねば ならぬ。
第七。軍備撤廢、死刑廢止、思想言論の自由等を 期

せねば ならぬ。

要するに、社會の改造とは 人が 人と成ること
である。人が 神に 歸ることである。神を
知ること、神に親しむことである。まづ 耶蘇の
愛を 深く味ひて 後、初めて 萬有の神を 己が父
として 敬ひ、各自 神の子供と 成りて、相互に
睦み樂まれる。爰に 社會が 全く 造り直され、
神國が 明に 現れ出よう。

社會改造の根本問題 をはり

左近義弼氏譯編聖書

創 世 記

特價金七拾錢
(送料六錢)

詩 篇

定價金壹圓五拾錢
(送料拾貳錢)

新約聖書 耶蘇傳 (四福音書)

定價金壹圓八拾錢
(送料拾八錢)

耶蘇教の初代 (使徒行傳)

定價金壹圓五拾錢
(送料拾貳錢)

發行所 聖書改譯社

大正九年四月十二日印刷

大正九年四月十五日發行

定價金參拾錢

複製を許さぬ

著者兼
發行者

左 近 義 弼

東京青山長者丸

印刷者

岡 千 代 彦

東京芝區新櫻田町十九

印刷所

自 由 活 版 所

東京芝區新櫻田町十九

發行所 振替貯金口座
東京參參六壹

聖書改譯社

東京市赤坂區青山南町五丁目參拾七番地

終